

19  
70

理学大乘論  
上巻

052948-001-4

特52-321

理学大乘論

山口 松五郎/著

上

M29-31

CAA-0337



序

凡そ學を講ずるの順序は先づ學を描寫學と究理學の二種に分して描寫學の性質を細論し然る後究理學の性質に論及せざるへからず然れども古今理學者が描寫學の性質を畧して直に究理學の性質に入るは他よ非ず究理學の性質にして明瞭なるを得ば描寫學の性質自ら明瞭すへければなり故に予の茲に描寫學の性質如何を細論せず直に此理學大乘論を講じ學界の一大門を開かんとするも亦此意のみ抑も究理學の二界より成り此間に一大別を存するは古代に在りても尙ほ暗に認めざるなし例ひば印度に於て文字般若の以外を觀照真如に分別するが如し又支那に於て老莊の學を虚學と云ひ孔孟の學を實學と云ふが如し又歐洲に於て顯象と實體の二派あるが如し此二派共に他の區域を僭領して自他相混し唯己の執る所を是として他を斥し然れども自他共に輔車相依るの關係に在るを知らず故に學問の進歩するに従ひ相互に衝突し兩派の勢相持して止まず輓近より至りて此勢の殊に甚しきを觀る此間固より中間に立つて此二派の調和を試むるの學者なきに非ずと雖も尙ほ此勢を防止するに至らざるは何ぞや他



なし其説く所に於て未だ此二派の性質を明解して兩存の道を與ふに足らざるに由るなり左れば學界に立つて學問の進歩を圖り其進歩をして疑ふ止む事からしめんと欲せば此道を講じて之を充全にする所なかるべからず即ち予の此書を著す所以なり

此書は上中下の三卷より成り上卷は實驗理想の一大別を總論し中下の二卷に於て實驗理想の兩種を各説せんとす今刊行する所は即ち上卷にして中下の二卷は次を逐ふて刊行すべし

曩に宗教論に於てスペンサーの實體存在論を實確の如く説きしは唯々實體存在に就き疑の成分を説き且つ疑を一方に決するの必要なる一理由を論するに於て氏の功も亦大なりとする意に過ぎざる義と認め同論を此書に參觀あらんことを冀ふ

明治廿九年十月下旬

著者識

### 理學大乘論卷之一 理學總論

本題に所謂理學に二種あり一は理想理學是れなり一は實驗理學是なり而て理想理學とは理外の理即ち經驗不達の理を講明する學の謂にして彼實驗理學と對峙して理學の全体を爲し苟も理學の全備を欲する上は此理學も亦必要缺くべからずと雖も近世實驗理學の觀念擴張し爲めに古代の如く實驗理學と理想理學を相混じて理學を講ずるの弊大に矯正せしと雖も同時に實驗理學を偏尊して理想理學を偏賤するの弊を惹起し爲めに理想理學を有害無益と爲すに至り又此甚しきに至らざるも理想理學の用は種々の假定より種々の假定を推考して唯思想力を鍛練するの効あるに過ぎずして毫も實用に益なしとするに至り理想理學を無用視し此學を理學の必要缺くべからざる一部と認めざるは世上一般の見解なるが如し彼印度理學者并に西洋古代の理學者が實驗理學に暗く理想理學の旨趣を毫末の疑なき事實と認め若しくは古今各宗教職が實利に疎く眞心若しくは偽心より理想理學の旨趣を眞實の事實として教を布くが如き事實より推さば此學は實に此見解の如く思想力鍛練の以外に益を及ぼさざる小益の學たるに過ぎずと云ひて可なり蓋し然るのみに非ず實に有害無益の學なりと謂はざるべからざるも彼ニコトンが學說の根據を立て彼スペンサーが學說の大則を定めて世學の進運に鴻益を與ふの幾分か理想理學を適用せし所あるに基くが如きより觀れば理想理學の有益なる理學たるは固より疑ひ無るべし左れば現時此理學の有害無益若しくは少益の學たるに似たるは此理學本來の性質に於て然る所ありて然るに非ず唯、此理學を講ずる

人の之を誤用若しくは濫用せしに依りて然りと謂ふべし而て此に至るの所以は畢竟理學の原則が未だ分明ならざるに存するのみ故に予は茲に此原則を講じて此等の憂を絶たんと欲す

今本論に入るに臨んで先づ理學なる語の意義を論明する所なるべからず蓋し此語の意義を論明せざる時は隨て理學原則の分明なる意義を明示し能はざるべければなり抑も理學なる語に當る西洋語の原義は愛知の意なりしが此二種講學の目安語なる愛知の精密なる意義如何と此目安語に依て講ずべき旨意の範圍如何に就て古來研究を凝らせし學者太だ多しと雖も固より一定する所なし茲にヒサゴラスプラトニストトールニヒキユラヌペーコンチカートホーラスロツクライブニツクベークレトカントレニルリングヘーケルハミルトンコントミルスペンサー等の學者が抱く所の見解を觀るには此目安語を道義原理の意に解して道義の原理を講ずるのみを理學の範圍に歸し又絶對の學に釋して所謂の實相即ち所謂の實質を觀察するのみを理學の領分に歸するあり又中には此目安語を顯象間の學に解するも之を上掲第一種の學者の如く唯道義原理の研究に限らず更に洪濶なる顯象間の研究を以て理學の範圍に歸するありて實に方圓相違ふの狀なり此目安語と此語と目安として講ずる旨趣の範圍に係て古今諸學者間の意見に於て既に此相違ある上は隨て其講ずる旨趣の事柄を異にするは自然の結果のみ且つ又此目安語を目安として講ずる旨趣の範圍を均しするも尙ほ其講ずる旨趣の事柄を異にする者あり例ひばロツクは理學の事物の確

實なる知識なりと云ひコントは諸學の普通方法關係并に特殊差異を考定する學なりと云ひカントは人間の必要目的と知識を研究する學なりと云ふ如く近世理學者はロツクの類を除けば理學の範圍に就て見解を同ふするも其範圍に屬する事柄を講ずるに至ては甲の熱説する所は乙之を冷黙し變止せざるが如し然れども人生際涯あり來象際涯なし故に此變更は到底免れざるべからざるも此目安語と之を目安として講ずべき學の範圍に係る見解との變更は免れざるべからざるに非ず而て免れざるは他に非ず唯愛知なる語は就き徹頭徹尾餘蘊なく意義を審明せざるが故のみ然らば此語を審明せんには如何すべきかミル此語の定義を論ずるの頭初に凡そ英語は之を狹義に解せば易く之を廣義に釋すれば善く適すとて此方法に依り其定義論に入りしは實驗を尊ふ英人の習癖に見及せしに由るならん也雖も此方法は獨り英語を解するの用に限るべからず何國の語を問はず苟も理學に係る語を解するに當りて用ふるも差支ひなかるべし左れば今此目安語の定義を論ずるに於て此方法も亦其眞義を發見するの一方方法なりと雖も此方法はスペンサーの眞理發見法即ち兼ぬる所あり何となればスペンサーの眞理發見法を語の眞義發見に適用するの旨意は問題に係る語に就き人類の附する見解を普く聚めて相異なる所は之を去り相合する所は之を取り其問題に係る語の意義如何を觀るに在れば此方法に依り語意を解せんとなれば則ち自然に其語意を廣義に釋するの結果に達すべければなり左ればミルの方法に依るはスペンサーの方法に依るに如かず且つ從來學者の發見せし方法の中に於てスペンサーの方法に優る者なかるべし然れども此方法を發見せしスペンサーにして此方法を用ひ理學なる語の解義を全ふせざる

上ハ氏の方法も尚ほ不完全なるに似たり然れども予ハ氏の方法を措て他に良法を發見する能はず且つ氏が理學なる語の解義を全ふせざるは不可思議者存在の思想を諸理學の必要なる一大基本と認められたれども此思想の理想學に屬するや將テ實驗學に屬するやの問題に分明なる見解を及ぼさず一意經驗的の學のみを以て學と思ひ理想學を抛つ爲に諸學者の理學に對する見解を活解するの道即ち人類考察の領分を誤り爲めに此方法の適用を誤てる所あり彼是事情を推さば此方法に於て決して不適當の點あるに非ざるなり氏唯々適用を誤てるのみ故に予ハ氏の方法に依り理學の定義を論じて氏の不備を補ひ其定義の完全を謀らんとす抑もヒサエラスの愛知なる意義に當る語を目安として講學の目的を立たる旨意を按するに凡そ人の學ふべき學文は廣し所謂地理學歴史學等の如き描寫的を主とする學文も學文に相違なきも此等の學問は觀物致知の學と謂ふより寧ろ記臆的に屬する學と謂ふを得べきが故に此類學文の外に致知の學文なかるべからず左れば描寫的の學は之を愛記とも名け記臆的より寧ろ究知的に屬する學は之を愛知と稱ひ諸學を記臆的と究知的に兩斷し究知的の學を講ずるには愛知なる語を目安に立て究知的の學を講ずると適當ならんと思ひて此語を此學の目安に定めたるならんと思はる若しヒサエラスの此目安を定むるの標準を此に存せずとして獨スペンサーのみならず歴代の學者が唱ふ如く其標準を學の淺深に在りせんか物理初學の如く最下の理學は之を理學に非すと謂はざるを得ず又スペンサーの社會學道學の如きは更に概括法に資し社會學道學に比すれば理學と謂ふを得べきも氏の原理學に比すれば理學に非すと謂はざるを得ず學界豈に此理あらんや左れば歴代の學者が致知の義を深

知の義とするの眞意は記臆的の知を淺知とし究理的の知を深知とし彼れ此れの間を區別を爲すの目的なりと思はざるを得ざるも表意は均しく究理的の知に淺深の區別を立てんとすること一般の狀態なるが如し既に此錯謬あり故に我國の如きは此弊もして高等理學を哲學として下等理學のみを理學と稱し甚しきは學課上理科を設くるも全く描寫的の動物書杯を此科に充つるに至れり又博士某は地理書の序文に歴代の學者地理書を著すや或るは理學的に之を著し或るは史學的に之を著し各家の意見區々にして此書の理學に屬するや將テ史學に屬するや其性質未だ一定せずと云へり理學なる語を目安と立つるの標準を學の淺深に存すとすの害豈に思はざるへけんや又或る理學を哲學と稱して之を他の理學と區分するの弊や英語に所謂「サイアンス」を科學と譯するに至れり若し果して此説の如く「サイアンス」を科學と譯するを適當とせば「フクロフクロ」は之を不科學とも譯すべきが此學何ぞ一科の學たらざるの理あらんや抑も「サイアンス」とは順序整列の考察を意味するも其順序整列の考察とは描寫的に究理的に考察の順序整列したる者を指し解剖學生理學法典立法學の如き諸學を含むも「フクロフクロ」は「サイアンス」と共に順序整列の知識を意味するに係らず唯々究理的に考察の順序整列したる者を指し生理學立法學の如き究理的の學のみ之に屬し解剖學法典の如き描寫的の學のみ之に屬せず此二者の關係は「スペンサー」の如く比喩擧れば實に家族と家員の關係に均しく「サイアンス」は家族にして「フクロフクロ」は家員に似たり此二者の關係に此相違あるも毫も科學たらざるの差別あるなり此差別なきに強て此差別を立つ理學なる語を目安と定むるの標準を學の淺深に存すとすの

害豈に又思はざるへけんや然るに「ヒサエラス」の愛知なる語を學文の目安と立てたる旨意を以て記應的に屬する學即ち適當「サイアンス」より區別するの邊に標準を建てたりとするときは此害なきが故に予は先づ人類の見解は獨り顯象間のみならず實體に及ばんとする者なりと定め亞て愛知なる語は愛記なる語に對して差別すべき語と定めてスペンサーの眞理發見法に依り既に氏の此法を用ひて歷代諸家の所見に参照の研究を爲せしむ係はらず其最も要なる見解に予が意見の是非を参照する所あらんとすアリストートルは愛知は學文の學文なりと云へり氏の此見解を取りたるは凡そ學を講ずる旨意は知識に達せんとし外ならず左れば殊更に愛知なる語を講學の目安と定むるは深遠の知識に達せんとするの意に出でたるならん果して此意に出でたりとせば愛知とは諸學の最大原理を知るを愛する意なりと見及せしに由るならん此他ヘボンが抽象的の理會を天然法に徴して或るは之を分解し或るは之を統合する學ありとする定義を観るもラカイトが最大原理に基く諸原理研究の學なりとする定義を観るもロッシが事物の確實なる知識なりとする定義を観るもライプニッツが圓滿眞理の學なりとする定義を観るもヘーゲルが同不同を均しふするの學なりとするの定義を観るもスペンサーが統合知識なりとする定義を観るも皆アリストートルの如く愛知なる語を深遠なる知識を淺近の知識より區別するの意に依りて用ひたりとして深遠なる知識に解せざるはなほ此諸家の見解既に此意を含む上は予も亦スペンサーの如く古今諸家擧げて愛知なる語を深遠の義に解すと斷言するを憚らざるなり然れども此語を淺近の知識より深遠の知識を區分する意は依りて用ふることをヒサエラスの眞意に非ずして其眞意

の描寫的の學より區分するに在ること既に説く如くなりとせば此等諸家にして若し之を知らば此等諸家も亦其愛知なる語に附する深遠知識の意は唯記應より區分する考察の義たるを認めざるべからず此等諸家既に此義を認め且つ人類の見解が獨り顯象間のみならず實體にも及ばんとするを認め顯象に對する思想のみならず實體に對する思想も亦講學の領分に屬するを許せば愛知なる語を以てヘーゲルの如く同不同を均しふする學と解するも予が民權論に論せし如く正とは少差の義にして萬物皆少差に依りて存在すとせば少差研究の學に解するもスペンサーの如く統合知識に解するも或るは可なりと雖も此愛知なる語を用ふるの主眼の記應を主とせずして研究を旨とするの意を表示するに在りて研究の旨意と方法は敢て問はざる所なれば究理學の畧語なる學理の義に解すること愛知なる語を用ふるの意に最も適するが故に予は愛知なる語の眞意を知らずして之を理學の義に解する學者と共に此義に解せんとす我邦學者の如きは此語を経學の意に解する者あれども此學に解する主意は唯史學のみを意味する緯學に對して區分する意たるを描寫的諸學の全体を緯學に視て之より區分する意たるを問はず此意を解するは理學の義に解するより及ざる遠し何となれば經緯の二語は比喩的にして的面に此目的を表明せざれども知記の二字は目的の面に此目的を表明すればなり果して然りとせば所謂「フロンテ」は理學の義と認め可なり左れば茲に理學の最大原則を論明せんには此語を此義に認めて理想學理と實驗學理の定義を觀察する所なかるべからず然れども實驗學理に就ては世上既に幾分の定見あるも理想學理に至ては殊に不明に屬する上に理想學理を説くときは自然の關係より實驗學理の性質自ら明

入  
瞭すへしと信するが故に斯に唯理想學の定義を明にし以下の本論に於ても亦唯理想學を主として觀察すへし抑も所謂理想とは經驗不達の事柄を研究する義なり此義に就ては古今理學の見解相互に衝突して未だ一定する所あらず今顯象派が實體派を攻撃するの要旨を觀るに凡そ知識は關係的にして實體の如き關係の分明ならざる者に同ひて如何に觀念を起さんとするも唯妄想を起すに過ぎずして到底完全の觀念を得る能はず古來實體を研究する學者多しと雖も甲説仆れて乙説起り新陳代謝し與敗始終止なしと雖も唯與敗代謝の事跡あるに過ぎずして毫も此學の進行せし形跡を存する所あらず此形跡を殘さざるは即ち知るへからざる事知らんと欲して徒に論戰を試み徒に論說を吐くの證とて觀るべし故に實相の事は理學に於て講述するの限に非ずとするに在るが如し予固より所謂實體に就て知識を得ひ能はざるは知らざるに非ず然れども實體の研究より種々の疑を起すは古今の學者共に之を認むるならん而て凡そ知識は差を分ち同を同として始めて成ることニンサーの説く所を以て明瞭なる上は疑の如き甲象を乙象に異りとする否や遠た乙象に同じとし乙象に同じとするや否や遠た異りとし始終異同の差別を定め能はざる意識作用は眞に知識を以て認むへからざるは予も亦知らざるに非ず然れども疑の物たる顯象派の一人なるパツルの説く如く發見の一因にして即ち社會文明の一支因と謂ふへし實に此物あればこそ種々發明の端緒を得べくして既に宗教論に論ずる如く社會に宗教を設け得たるは此物あるに由るなり疑の物たる貴き此の如し然れども眞に疑はしきを疑として存せず濫りに決するときは全く疑を缺くと均しく害を起す者なり即ち印度宗教者が理想學を誤つて社會を

害する所あるを推して知るへし而て疑の物たる貴き此の如くにして理學者の此物をして害を爲さしむるに至るは理想學の本質を知らざると疑の用法に就き實利學に依りて取捨する道を竭くさるるに由るならん左れば疑の害を避けて利のみに就くときは疑の貴き益も明瞭し隨て此物を講ずる理想學の貴き愈も明瞭すへし而て疑の取捨其宜を得て諸學其基礎を確設するに至るは顯象派と雖も暗に認むる所なり故に予は疑の眞に知識と稱すへからざるを知るも尙ほ實體に對する疑を不適當知識と稱し此疑を講ずる學即ち予の所謂理想學を理學の一種と認めん管々之を認むるのみに非ず諸學最大基本を定むるに必要なる二大則の一と認めんと欲す蓋し此學の講任は本來自然の關係よりして宗教職の職務に屬すと雖も宗教職に非らざる予の却て此任に當るは他に非ず宗教職の此學を誤解する甚しく隨て宗教職以外の人に於て此學の必要を知らざるより隨て理學の最大基本が此學の最大則と實驗理學の最大則の雙方より成立するの理を認めざるに依るのみ  
夜間仰て上空を望めば上空の將に盡きなんども認むべき邊に諸星煌々相連り幾千萬なるを知らず然れども其上空の將に盡きなんども認むべき邊固より上空の盡くる所に非ず上空既に其邊に於て盡くるに非ざれば諸星も亦其邊のみを以て盡くるに非ず星の數固より知るへからず且つ天文學者の説に依れば彗星は破裂体の分在なりとも云ひ一種の別形星なりとも云ひ未だ一定せざれども假に後説を非なりとせば人目に映する諸星ハ圓体なれども諸星の盡くる所にして既に知るへからざる上は其以外の諸體悉く圓体なりや否や知るへからず且つ吾人は萬物の靈長と稱するも諸星の中には智能は吾人より幾億萬倍多く體軀は地球と北

彗星の間を一跨けする程巨大なる動物なしとも知るへからず又智能并に体軀の此巨大なる動物に幾億萬倍とも定むへからざる程優絶する動物あるも知るへならず佛者の畫を以て示せる鬼の如き者の存在する世界あるも知るへからず又十八史畧に掲ぐる長命の帝王を假りに會て存せしとせば人類に此の如く長命あること實に驚くの限ならんと雖も此類の帝王に幾億倍の長命なる動物の存する世界あるも知るへからず又動物學者の曾て説かざる動物の存する世界あるも知るへからず又植物學者の説かざる植物の存する世界あるも知るへからず又礦物學者の説かざる礦物の存する世界あるも知るへからず又化學者の説かざる元素の存するのみならず所謂の元素も一種化合物と認むへき世界あるも知るへからず又地質理者の説く所と地質の沿革を異にし天文者の説く所と天文を異にし物理學者の説く所と物理を殊にし化學者の説く所と化學を殊にする世界あるも知るへからず之を推して宇宙の洪大にして無量の殊様を無限時に爲す事情の多きを想は現時人類の思想は先天的に存すると後天的に得たると兩様に依りて存するとを問はず其思想を以て之を知り竭すことは固より之を疑ひ竭すことさひ能ふへきに非ず若し其思想を及さざる情事の部分を以て宇宙情事の全体に比すれば一小沙の地球に對するより更に小なりと云ふも可ならんか若し地球の進化現時に幾億萬倍し隨て人類の智能も亦幾億倍するの時ありと假定し此時に及び人類の宇宙の情事に疑を起す部分も亦現時に幾億萬するに至りと假定するも尙ほ此觀あるを免れざるへし左れば印度理想學者が十界十如三世間等の目安を設けて(説又は)疑を起すは唯顯象間に之を起すの意か顯象並に實體の兩者に向ひて之を起すの意か何れの意なるにもせ其疑を起

す部分は小又小にして且つ今后幾億年間此類の學者が世を繼て此般の疑を講ずるも之を述  
 竭すへきに非ず又西洋流の學者が相加はて講ずるも述竭すへきに非ず左れば予の茲に此學  
 を講せんと欲するは固より此般の疑を述竭するの意に非ず唯其最要なる者を講述して此  
 學の正路を示し各宗教職の正當に此學を講せんことを望み兼て其教職の及ざる所は以外の  
 學者も亦之を講して其及ざる所を補ひ此學と實驗理學と對峙して理學の最大基本を建てん  
 ことを望むにあらざらん

實體の存不存は人類が宇宙の起源如何を觀察する毎に起らざるなきの問題にして之を積極  
 に決する者あれば之を消極に決する者あり昔日も今日も未だ論裡戰場より撤回せらざるの  
 問題なり然れども孰れの意に決する者多きかと問は積極の意に決する者古今東西共に大多  
 數を占むと謂はざるへからず然れども所謂有神論の多數を占むるは實體存在の確證あり  
 て信し易き所あるの故に非す他に故あるなり其故とは人類が智慧の不完全なるが爲め唯  
 實驗上よ於てのみ安心立命の道を行ふも其目的を全ふすへからざるより種々思案の折柄に  
 於て適く宇宙の起源如何に思想を灌き遂に實體の存不存に疑を發し實體の存否は固より知  
 るへからず隨て實體に依頼するも之を採捨する程も固より知るへからず然れども其存在せ  
 ざるの理既に審らかならざる上は其採捨せざる程も亦審らかならざれば之に依頼して此不  
 足を補はんこと實利に稽ひて得策ならんと決し予が宗教論に所謂の宗教の本体を設くるに  
 至り茲に於て宗教職を説けて無信者を歸依せしめんとせしとき非常の抵抗に遇ひ誤つて有  
 神無神の水掛論を始めしより以來有神説を唱ふることは宗教職の習慣となり今日尙ほ此習



慣の去らざると學說上實體の存在を假定するの必要あるとに由り誤つて知らず識らず有神論を唱ふる者の多きに由るのみ夫スペンサーが實體存在の論證は如何にも巧みありと雖も敢て實體存在の證左とするに足るなし若し氏の説く如く可思議者の觀念が不可思議者の觀念と相待つて起り不可思議者の觀念を離れて不思議者の觀念を生ずべからざることの性理上の事實たるに徴て不可思議者の存在を確實と認めざるを得ずとせば相對の全は絕對の全と相對するの謂にして前者の觀念は後者の觀念と相待つて非ざれば起らざること性理上の事實たるが故に絕對の全も亦存在すと認めざるべからざるに之を存在すともせずと決すべからすと明言し尙ほ不可思議者の存在を確實と明言せしは撞着の所爲に非らずや又無限とは知るべからざる限の謂なれば無限の存在は固より知るべからざるも無限の觀念なく固より有限の觀念あるべからざるは性理上の事實なるが故に性理上實體存在の觀念が顯象の觀念と相待つて相離れざるより實體の存在を確實と認むるを得ば無限の存在も亦確實と認むべきなり然るに氏は最大原因の性質は無限とも有限とも決すべからすと斷言し尙ほ實體の存在を確實と明言せしは撞着の所爲に非らずや氏の實體存在に於ける論證の取るに足らざる此の如し推して古今諸家の論證が荒唐を遁れざるを知るべし足る故に予は有神論者と無神論者の意見衝突は實體の存在を観るの不明なるに依らず唯く有神論者は存在の一邊に眼を注ぎ不現在の理は之を度外に措き無神論者は全く反對の所爲に出で互に己を知つて他を知らざる恰も昔者希臘人が表裏殊色の建碑存に就て相争ひし場合と一般なりとす故に宗教職にして脱然舊習を去り一日も早く實體存不存の不明なる事等を説き且つ宗教の立つ所以を

教ゆるあらは無神論者も忽ち其新說教に悦服すべし  
 上掲の所論を推せば實體の存不存に就ては唯く疑を起すのみにして眞に知識と稱すべき知識を得べからざるは太だ明瞭なりと雖も獨り宗教的に其存在を妄信するのみならず學說的にも亦之を妄信し此妄信の本根を下す所甚だ深く且つ支根を及す所甚だ廣く容易に抜くべからざるが故に更に其存不存分明ならざる理を詳論せざるべからず今理學者の物体不滅説を聽くに凡そ物体に消滅の状あるは唯く形相を變するに過ぎずして消滅するの實あるに非らず故に尋常消滅と云は陽には不存に歸するを意味するも陰には變相を意味するのみ而て物体の消滅に歸せざるは不可思議靈力の不消滅なるに基く要するに凡そ物体の名稱ある者は原素の最極一分子も太陽の如き巨体も共に不可思議靈力の顯表にして此靈力の原素を顯すの方法如何は之を知るべし由なきも然れども其顯す所の原素に至りては可知的に屬し吾人其性質を知る之を知るが故に物理學上炭酸素等の名稱を以て之を差別し得るなり且つ吾人其性質を知る唯く物として之を知るのみに非ず此原素を起す力の相も亦之を知り得べきが故に化學上には親和力等の語を以て其相を説き物理上には運動等の語を以て之を論じ又此原素の結合して起す力にも種々の名稱を與ひ其内界に屬する者には意識等の語を以て相名を定め其外界に屬する者には物力等の語を以て相名を命し得るなり而て此等可知的力も亦彼物体と均しく不消滅に屬し消滅するが如き状あるも例ひは電氣の動相を失するときは火相と爲りて存するが如く唯く此状あるに似て此状の實あるに非ず此他動の不斷にして消滅せざるの理等を歸納的事實に徴して此等理の確實を證明するときは可知的力の凝存して消

滅に歸せざるは實に疑ふへからず左れば彼物体の不消滅は不可思議靈力の不消滅に基くと云ふ雖も先づ可知力の凝存を基き終局不可思議靈力の不消滅なるに基くとするの意なれば可知力の凝存固より不可思議靈力の不消滅に依らざるなし抑も實驗界に於て諸理を究むるときは萬物の進化すれば溶化し溶化すれば進化し進化溶化の間に往復して變化し止まざるは可知力の凝存に基き此力の實驗界に凝存して止まざるは畢竟不實驗界に不可思議靈力の不消滅なるに基かざるなし此靈力の永存不滅なるは今客觀的に論證する所を推して明瞭なるのみに非ず宗教極意學說極意此二意一致契合の三論に於て主觀的に論證する所を參照せば更に疑ふへからずとすること此理學者が實體を永存不消滅ありとするの大意なるが如し今此大意を推して此學者が主觀的に實體の永存不消滅を論證する旨意の是非如何は姑く之を措き客觀的に論證する旨意の理非を察するに凡そ實驗界に於て萬物の種々様々なる狀況を以て或るは進化し或るは溶化し進化溶化の限なく存する状態の經歷は不可思議靈力先づ或る可知力の或る一方例ひば壓力若しくは展力を生ずるか又は同時に引力と展力即ち支那學者の所謂陰陽の二力を起すかして此一方若しくは二力は或る順序に依り或るは電氣と爲り或るは動力と爲り或るは火力と爲りて變化せしに在りとすること此學者の眞意とすること此學者の可知力凝存説を推して明瞭なりと思はざるを得ず若し否らすして婆羅教徒の夙に説きし如く電氣なり動力なり火力なり況て可知力の一種が滅相するは實體に還り顯相するは實體より出つとすること此學者の眞意なりと認めれば此學者の凝存説は實體の凝存を意味して可知力の凝存を意味せずと思はざるを得ず然れども此學者が直接に

凝存説に強て與ひんとする義は可知力に在ること此學者が此説の目安を實驗的の論部に置くを推して知るに足るが故に予は所謂説凝存を以て可知力の凝存を説くこと此學者の目的と認め宇宙の萬象變化限りなき現体に至りたるは不可思議靈力先づ或る可知力の力を生し此力の變化して始終止むなきに依るとし實驗學より云はば宇宙の萬象は此力の結果にして實驗的に最終の因と認めべき者は即ち此方に外ならずとすることをも此學者の眞意と認め茲に此學者に向ひ此方へ唯々相より成立するか又は相と体とより成立するかを問はん若し相のみより成立すと謂はんか相は出沒常なく凝存する者に非ず例ひば電氣の動が光に變ずるときは電氣は光として存するも動として存せざるが如し若し相と体とより成立すと謂はんが其体とは如何なる体か知るへからざるの体なりとせんが知るへからざる者より知るべき者を生ずと説くは萬象顯す神ありと説くに均しく更に發明の意あるに非ず此學者に此謬見ある近因は他に非ず凡そ講學の結果は講初の假定を證明する者外ならず故に實體の存在を證明せんには唯々實體の存在を假定するを要し不存在を證明せんには不存在を假定するを要し顯象の暫存を證明せんには唯々顯象の存在を假定するを要するに過ぎざるも此學者の顯象間通理を講ずる方法は則ち然らず顯象上の假定を爲せしと同時に陰に實體上の假定を爲し爲めに最終の目的を顯象の講究に建てなから却て之を實體存在の證明に立つるの不條理を爲せしに由るのみ此學者既に此謬見あり推して其實体論證の錯謬を遁れざるを知るに足れりと雖も茲に實體の永存不滅なるの理の分明ならざるを證明せん爲め之を發露する所あらん凡そ顯象とは佛教家の見解より觀れば清淨なる實體が宿世の惡報として汚濁な

る實体に取り付かれて變せし結果なる土石草木禽獸人類の如き所謂る方向不定且つ無常存の者即ち所謂る迷とも解しへからん又耶穌敎家の所見より觀れば上帝の工造せし現界の諸物とも釋しへからん然れども此の如き不開の見解は早く已に學者の容れざる所なれば近世性理學者の説く如く實体の或る部分が實体の他部即ち心意本体の上に與ふ印象なりとせんか果して之を顯象の正解なりとせば此印象は外より實体の或る部分が心意本体の上に衝迫する衝働其れ自身を指すの義なりや又心意本体が外より衝迫せられて感動するの意なりやを問はざるへからん前の意なりとせば若し北斗星の如き諸天体にも動物ありと假定して印象の存する區域の有無限を考観するときは實体の有限無限と均しく決し難かるへし若し後の義なりとせんか昔年他界動物の心意本体に印象せし實体の或るの部分は今年地球動物の心意本体に印象し今年地球動物の心意本体に印象せし實体の或る部分は他年他界動物の心意本体に印象し實体の印象する所の際限を知るへからざるは尙ほ實体の有限を知るへからざるに異ならざるへし而て今日顯象として存在する或る部分は昨日實体として存在し今年實体として存在する實体の或る部分は來年顯象として存在し所謂る顯象と所謂る實体は易位更迭更に此間に不變の限界なきを推せば顯象を暫存とせば實体も亦暫存と爲すへく實体を永存とせば顯象も亦永存と爲すへく顯象も實体も共に暫存とも永存とも決すへきに非ず要するに實体と顯象の別稱は隱体と顯体の區分を立つるに過ぎざるも學者の顯象を暫存と立て實体を永存と定むるは講學上便宜の爲め存定するの精神に外なきあり若し因と果の間に暫存永存の確平たる區別に達し能はざるは此二者を別稱する實体顯象なる語の適當あり

らざる爲めなりとして此語に更ゆるに耶穌敎の所謂る上帝説若くは佛敎の所謂る迷説を以て考究するを適當なりとするの人なきも知るへからずと雖も此二説は依りて説かんとするときは完全の見解を得ざるのみに非ず却て不開の所見に陥ること太だ明瞭なるが故に予は實体の永存不永存は知るへからずと明斷しスペンサーが實体の永存説も唯々存在を假定するに過ぎずして眞に知るへしとするの意に非ずと認めんのみ此事や氏がミルの意見に反し顯象永存説を立て意を推すも老子が無極大極を生ずとせし意を推すも東坡が變より觀れば不安心なれども不變より觀れば安心なりと思ひし意を推すも佛者が無有を生じ有無を起すとせし教を推すも西洋古來の學者が顯象は不變不易者の顯れ方にして即ち此者の動作より起る結果なりと説きし意を推すも此他百家の説に徴して考ふも予は誤たするへしと信するを得ざるなり

更に實体の何たるを解すへからざるの理を知らば實体の存不存を知るへからざるの理益々明瞭する所あらん凡そ客觀の何たるを知るは他に非ず物体其れ自身即ち顯象其れ自身即顯象を實体の或る部分并に心意本体或る部分の或る心意本体の或る部分を衝動する其衝動其れ自身に就て心意本体の部分が感覺する所あり此感覺する所と其衝動其れ自身が比較の關係を有するとき肯定的比較に達するに由るに外ならず左れば所謂る印象を此關係の義なりとせば所謂る知識は心意本体がスペンサーの説く如く先づ此關係を差別し然る後其差別を立てたる印象の中に就て少差大同を立て起せし意識の情況にして心意本体が此小差大同を辨せんとして未だ辨し能はざる情況は所謂る疑是れなり而て此疑は彼知識の基本にして彼

知識の立つは即ち此疑を假りに一方に決し之を心意本体が作用を起す所の根據と爲す由  
 るなり例ひば茲に三個無差別様の物あり其中の或る一個を知らんとせば先づ此三個の差別  
 を立て其中の或る一個を假りば他の一個に相似たりとして更に他の一個を參看して異同を  
 辨せんとし其知らんと欲する一個が自餘二個の一個に似ること少くして他の一個に似るこ  
 と多きを發見せざる間は頭初の假定は唯々疑として存じ知識とならざるも若し之を發見せ  
 ば知識となるが如し故に知識とは先づ異を辨し然る後同を辨すること即ち異を分つ同を合  
 するの義にして之を最も簡易に解せば分合の義と爲り疑迷とは不類似を分つ未だ類似を合  
 せざる義にして之を最も簡易に釋せば分の義と爲る左れば洋學者の中に知は差なりとする  
 解も漢學者が知は分なりとする解も通俗に於て知を分別なりとする意も共に唯々疑の解た  
 るに過ぎず知と疑の間に區別ある眞に掩ふへからずと雖も知の疑より起る事實を推し疑も  
 不適當なから知の一種と認めて可なり然れども理學上知の眞味を知らざる今日に當り疑の  
 知たるを説く唯々上解を以て惑を解くに足らざるが故に更に進んで知の知たる所以を詳に  
 する所なかるへからず抑も現時人類が心意本体の中に所謂る知として蓄藏する所の知は外  
 より實體の或る部分が主觀的心意本体に向ひ會て衝動せし其衝動の直寫再三寫十回寫百回  
 寫千回寫万回寫等即ち會て實驗して寫取せし者并に歴史傳記記錄法典動物書理學書談話の  
 如く苟も他人の報告に係る者より寫取せし者と現に此類の報告并に謂所る活物に就て實驗  
 して得たる衝動の寫との二類に分解するを得へし而て前の一種は所謂る經驗とも稱すべく  
 後の一種は實驗とも稱すべし而て通俗一般知と云ば此類衝動の寫を指す義にして智者が爲

せし寫も愚者の智が爲せし寫も一般に之を知とする敢て意味なきに非ず且つ學問上一般に  
 所謂る知も此義なりと雖も疑も亦知の一種なるが故に茲に實體の何たるを知るへしとも知  
 るへからずとも知るへからざるの理に論及するに先ちて理學に要する疑の性質に就て更に  
 觀察する所なかるへからず抑も疑を疑として述ふるの必要は獨り理學の上に存するのみに  
 非ず描寫學にも存せざるはなし先づ理學に存するを例せばスペンサーが絶對因の原働は展  
 力なりとも認むべく又壓力なりとも認むべく又引展の二作用なりとも認むべしと爲せしが  
 如し又描寫學に存するを例せば歴史家が疑に遇ふとき自己の不充分なる理學に依り之を究  
 察し若しくは理學者に之を問ひ尙ほ決せざるときは之を假りに描寫的寧ろ近畿的寧ろ記臆  
 的の疑として述ふるが如し而て此疑を知の一種と假りに認むへきは獨り理學者之を許さ  
 るへからざるのみに非ず歴史家も共に之を許さるへからず何となれば歴史を記臆的の知  
 と稱するは所謂る知即ち適當知と所謂る疑即ち不適當知を合名するに外ならず又理學を統  
 合の知寧ろ究理的の知と稱するの主として疑を推して考察せし結果を指すも疑を推して達  
 せし結果は暗中疑を意味するを免れざればなり左れば理學者若しくは歴史家が知らず識ら  
 ず疑を知と同類に置き之を知の一種と認むるは敢て疑ふべからず更に疑が知の一種たるを  
 他端より觀察せば此理益々明瞭ならん蓋し古今疑を以て疑として認めながら之を知を以て  
 目するの學者は一人もなしと雖も性理學者が性理上研究の領分を知情意即ち知情に區分す  
 る上より觀察せば裏面上知を以て認めざるなし何となれば苟も性理學を以て心意本体の顯  
 象全体を考究する學とすれば疑の生する理も亦考察する所なかるべからず而て疑の知

情孰れに相似たるかを問はば知は相似たりとするの外なかるべからず若し知は知なり疑ひ疑なり彼れ是れ全く別物として所謂の知情なる語に於ては疑を意味せずとせんか心意本体の一種顯象を缺遺するの性理學は完全の性理學に非すと認めざるべからず果して然れば苟も性理學の完備を欲する上は心表の最大一部なる情を情即ち適當情と意即ち不適當情と兩分するが如く心表の最大他部なる知も亦適當知即ち真知と不適當知即ち疑に兩斷して疑も亦知の一種を以て認めざるべからざればなり更に他語を以て上説の要旨を再述せば吾人が宇宙に就て考察する區域に二界あり其一界は客觀的客觀即ち實體の或る部分が心意實體を外より衝動する其衝動其れ自身總体の謂にして之を記憶に存するの手段は描寫學に存し之を考究に供するの手段は理學原論并に以下の理學に存し他の一界は主觀的客觀的即ち實體の或る部分なる心意本体が心意本体の他部分を衝動する其衝動其れ自身の汎名として之を攻究するの手段は性理學に存し此等手段の進化するに従ひ此二界共に廣く且つ永きに達すと雖も更に盡くべきの見込なきに似たり此見込みなきは此二界を顯す隱体の果して際限なきや否やは知るべからざるも隱体の未だ盡きざるに由るならん而て隱体の事に就て古今談論百出し未だ鎮定するの狀なし而て之を鎮定するは理學原論の本領に屬するが故に此學を講して妄斷の所爲を防ぐ所なかるべからず抑も此學を講せんに隱体の性質如何をも觀察する所なかるべからず而て之を觀察せんには先づ知と疑の眞義を知らざるべからず而て此二者の眞義を觀察せば所謂の知は知に相違なきも疑も亦知の一種なりと云ふは在るのみ既に知と疑の眞義を明解せり故に進んで古今の學者が隱体に與ふ所見の果して知に達するか將

た唯々疑に止まるかを觀察する所あらん抑も隱体の性質如何は古來人類の明解を得んと最も冀望する所の問題として學者の此問題に與ふ解義少からざるも最も要なるは智説心説理説實體説力説是なり茲に先づ智説より觀察せんに此説の起源は萬象の奇變を爲すは奇妙不思議の働を爲す者ありて然るなり然らば此働を爲すは何物なりや凡そ人類が觀察する諸物の中に於て最も奇妙の働を爲す者は智に若しくはなし蓋し人類の萬物に長たるは智あるに由るれば人類の及ぶべからざる奇妙不思議の働を爲す者い更に高等の智を有する者ならざるべからずとする考を起し遂に萬物の本源を智と認むるに至りしならん然れども人類の眞に意識する所は前に説く如く唯々顯象に止まり本体に及ばざるが故に此説の意味する所は唯々疑を意味するも過ぎずして知に達せざること明なり又心説の起源如何を觀察するに凡そ物として喜怒哀樂の情なきはなし神も亦此情あるは當然なりとする俗見を經ひて遂に觀念説に達し大に勢を奮ひたりと雖も隱体の果して觀念なりや否は固より知るに由なかるべければ此説の唯々疑を起すに止まり知に達せざるは明なり又理説の起源如何を觀察するに凡そ萬物の變遷は物体若しくは物体の意味する力ありて之を起すに似たれども物体若しくは力の働を爲すに皆則る所の理あらざるはなし此理は本にして物体若しくは力は未なり左れば所謂の神は理の全体を指すなりとする所見より起るならんと雖も所謂の理の全体の中に實驗し得べき理を意味すると同時に實驗し得べからざる理を意味するが故に此説の疑を脱して知に達すべからざるは明なり又實體説の起源如何を觀察するに凡そ宇宙の萬象出沒無窮なるは不變不易の實體あり此實體の種々と相を變するより來り相は假なり此假ある

は實の存するに由る相は新陳代謝するも實は舊に依りて變易するなしとするの所見に起り宇宙萬物を内外の印象に區分する性理學に依り根據を固すと雖も所謂現象は心意本体を外より刺撃する其刺撃と心意本体の現象を合稱する義たると唯も心意本体が内外の刺撃を感動する情況を單稱する意たるを問はず其現象も亦固と實体の一部を占めたるは出沒無常の現象を實体の相ありとする意味より推して疑ひなし左れば其表面上現象を出沒無止とするの意は裏面上現象出沒無止なるは實体の變易して止まざるに由りとするの義を舍むと明なり而て此説の今見る如く表面上肯定する所を裏切りして否定するは即ち唯も疑を意味して知よ達せざるを推すに足れり又力説の起源如何を觀察するも凡そ萬象は最終因の結果なり此因の此果を生ずる必ず順序なかるへからず但し順序とは類似の前者あれは必ず類似の後者を起すの義にしてミルが所謂前者と後者と一定不變の理に依りて繼續するの謂なり例ひば惡事を爲せば必ず惡果あるが如し今自ら實驗せし所を古今の學說に徴し此順序の果して然りや否やを先づ物体界より考察するに萬象の或るは進化し或るは溶化し須臾も變遷を止めざるは外界の印象なる物体の或る物が他物に變化し他物亦他物に變化し此間に一定不變なる關係の存するを認めざるを得ず而て此關係の存在は物理者の所謂物体不消滅なるよ由らざるへからず此關係の存する限りは物体不消滅の理は之を確實と認めざるを得ず而て物体の不消滅なるは物体なる印象の要素として認むべき力の不消滅なるに由らざるを得ず左れば物体不消滅の極意は力の不消滅を意味すと謂ふも可なり故に力の不消滅を外界最大の通則と認むべきなり更に内界を顧み之を性理學に徴し其最大の通則を取り進ん

て兩界の通則如何を考觀せば兩界共に不可思議者の顯表にして兩界の相似たる所は力なる顯表に存し兩界契合する顯表なる力も亦一定不變の順序に依り變相して止まざるは力の凝存して滅せざるに由らざるへからず左れば力の凝存して止まざるは可知界の原則と謂ふべくして此原則より推して考ふれば此力の可知界に顯出するは實体の如何なる作用より起るかを得て知るへからずと雖も此力の萬般經驗の最終なるより推さば實体の知るへからざるに係らず實体も亦假に力と認めて可なりと見及を爲したること此説の起源にして今將に世上の學者を擧げて旗下に立たしめんとする説なり然れども此説の唯も疑を意味して知に達せざるは此説の自白を推して知るへし即ち此説に於て不可思議者を以て力に以てするは抑も力の萬般經驗最終者寧ろ萬般經驗の盡く意味する普通の印象なるが故に假りに此語を以て不可思議者を推すに止まり之を力として知るへしとするの意なきは此説に於て不可思議者を目するに力なる語を以てするときは此語に不可知なる語を冠するを以て明なり古今の學者が實力の性質に係つて知に達せざる此くの如し更に隱体の存する所の無限有限即ち隱体の或る存法なる空及時の有限か無限かを觀察せば更に明ならん抑も空と時は共に内外の印象が普く意味する力の經驗より起る印象の要素を意味し力の存する所は必ず相伴ひて相離れざる者なるが故に若し隱体の性質を知るべき力に類似すとせば空も亦隱体の一性質として相伴ひ力なる隱体の一性質が存する所は必存し其一性質の存所に際限なしとせば空及び時も亦際限なしと思はざるを得ず此點より觀れば時若しくは空なる隱体の一性質も亦際限なきに似たり然れども若し地球が大陽の周圍を環る運動を假りに永存とし宇宙の

變遷も亦此關係に似たりとせば今日遭遇する所は即ち昔日遭遇せし所とも認め得べくして此點より觀れば空若しくは時も亦際疑ありと思はざるを得ず空の有限無限實に知るへからず既に之を知るへからざるとせば隱体の性質隨て知るへからず隱体の性質既も知るへからずとせば隱体の存不存隨て知るへからざるなり

更に幽靈說より推して隱体の知るへからざる所以を觀考せば此理益々明瞭する所あらん抑も此說に依れば生人の死者を想して種々の想像を起し或るは苦痛を感じ或るは快樂を感じずるは死者の幽靈生人の心意本体に向ひ表顯し自箇所思を述ひ三界行く所として其處を得ず迷路躓蹶實に苦痛極まるるとき所謂の地獄に陥るときは苦痛を訴ひ往く所として其處を得ざるなく萬事圓滿更に不足する所なきとき所謂の樂土に達せしときは歡樂を告ぐるに依り生人の心意本体が死者の心意本体と相接し死者の苦痛と歡樂を想するに由れりとして心意本体は死後尙ほ舊に依り構成を存すとするを意味するも實驗性理說に依れば心意本体の萬般思想を發するは人類の無機物たる状態より有機物たる状態に遷り更に下等動物の状態より現時の如く高等動物たる状態に至り此際百般の境遇と相接して遂に現狀の人体に達せしに由れりとするごと一般の見解なれば此見解より推さば幽靈說は之を虛妄なりとして蹴棄せざるべからず然れども假定に加ふに假定を以てせば此說も亦蹴棄すへからざるの理なきに非ず抑も星雲說に依れば宇宙は所謂の元素より更に細微なる者各々特殊の集點に向ひて集合するに依り遂に現態を成せしとするの見解なれば若し此見解の如く元素より更に細微の物質を存すとせば此物質も亦空及び時の原形を有する者と思はざるへからず果して此物質

にして空及び時の原形を有すとせんがカントの時及び空の觀念は心靈作用の原形なりとする意見を推すときは心靈の此作用を發するは心靈本体を構造する物質か空及び時の原形を顯すに由りと思はざるを得ず果して之を思はんか心靈本体を構造する物質の意味する所謂不可思議靈力は獨り時及び空の原形を意味するのみならず萬象を顯すの能ある者を指す義なれば此靈力の部なる心靈の物質は獨り空及び時の觀念のみならず萬象の觀念をも發するなしと思ふへからざるも非ず果して然れば人類は人類たる境界に於てのみならず動物植物たる境界に於ても無機物たる境界に於ても元素たる境界に於ても微塵たる境界に於ても百般觀念を發し且つ百般所作を爲すことなしと思ふへからず左れば此點より觀れば幽靈說も亦意味なきに非れず然れども空及び時の二觀念を除く外はカントも亦自生自存を許さず且つ相對家に於ては空及び時の觀念以外の觀念を自生自存を以て許さざるのみに非ず空及び時の觀念も自生自存を以て許さざるが故にカントの意見を推して幽靈說を觀察することは之を措き觀念は汎て相對より起りとして此說を觀察するも假定を重ねるに假定を以てするときは尙ほ此觀なき能はず抑も一元心物說若しくは多神作一心物說を以て性理を説くを性理辭學の眞意に適ふとするは相對家學て異存なき所なれば人類の心界も亦力に相似たりとも認むべき者が三種の異法即ち内外界なる差別に依り時及び空の原形を以て種々に向背の運動を爲すに始まり先づ情を顯し然る後知を顯し遂に現狀の如く複雑なる狀況に達せしと認むるも亦相對家學て異存あるへからず果して異存なしとせんか凡そ宇宙の間に存在を爲す者は「コンマパチリン」の如き有害物を構造せし微塵物質の原形も曾て唯我獨尊說を立て

し釋加若しくは浩然養氣説を立てし孟子の身体を構造せし微塵物質の原形も世界學者の王を以て自ら居るスペンサーの排摺物を構造せし微塵物質の原形も他界若し高さ幾億兆里横さ幾億里又は反對なる豎尺横尺の智物若しくは愚物を存在せせば此智物若しくは愚物を構造せし物質の原形も苟も時及び空の原形を意味する上は他物の原形と異法相接して先づ情を發し然る後知を發し又言語を發するなしと思ふへからざるに非ず此事は石の如き物が飛行するの理を假定に加ふに假定を以て想像せば思ひ當る所あるへし誠に先づ唯物派の物理家に此理を問はニュートンの原則を推し引逐の二作用に歸して止むならんと雖も唯心派の物理家に問は心を作川なりとも思ふならん果して之を思ひ石の類に心を存すとせば情を發し又知を發し又言語を放つ性質なしと思ふへからざるに似たり左れば曾て人体を構造せし物質は今「コンマパチリン」と爲りて存するも所謂幽靈を顯はし生人の心意本体に相接して宣言することあるも知るへからず若し實驗性理學者として生理上の見解を執り思想を發するには之を發するの神経系なかるへからず言語を發するには之を發するの氣管なからず彼蟲類が感覺を發するは應分の神経系類似を存するに由る然るも尙ほ氣管を有せず之を有せざるが故に感覺を發するも言語を發するなし此事實を推せば「コンマパチリン」の如き曾て人体の間に爽するも神経系類似と氣管の影形をも存せざる物の思想を發し言語を發するの理あるへからずとせんが試に此性理家に問はん氣管若しくは神経系を顯す者は何物なるか唯心派の所謂る心を措て他に之を顯す者あるか若しわれば證を擧げざるへからず恐らくは擧げ能はざらん若し之を擧げ能れば心を以て之を認めざるへからず果して心を

以て之を認めんか宗教家の所見に依れば唯心派の所謂る心は純全なる萬能の神にして何事も爲し能はざる所なれば一方に神経系并に氣管を顯し然る後思想と言語を顯すの能あれば他方に「コンマパチリン」の如き物を顯し直に思想若しくは言語を發するの能も亦なかるへからず果して此能も亦存すとせんか此點より觀れば幽靈説も亦意味なしと謂ふへからず實驗性理家若し人類の思想を發し且つ言語を發するは縱令唯心派の所謂る心の發動なりとするも此心の思想若しくは言語を顯すには之を顯すの順序なかるへからず宗教家の所謂る萬能とは此心の其順序に依り顯す所の能を萬種無量と認むるの義にして決して其順序を破りて能を顯すの意と認むへからず此事はダーウヰンの説く如く人類の現狀に達せしは無機物先づ有機物より進化し有機物は或る順序を経ひて猿類に進化し猿類は人類に進化し百般の境遇を経歴して幾多の秩序を順行せしに基くの事實を推して明瞭疑ふへからず然れば唯心派の所謂る心を宗教家に於て萬能の神と認むるも此心の「コンマパチリン」の如き物を顯し此物に憑り直に思想若しくは言語を顯すとするは宗教家が此心を萬能の神なりとするの意に於て之を許すに非ず且つ實際に適せず故に幽靈説は全く意味なき妄説なりと斷して可なりとせんか予は宗教家の所謂る萬能の秩序順行を意味せざるは人類が知的手段の全く竭盡せし曉に至り冀願を手段として其萬能を喚び起さんとするの事實を推して明瞭なりと思ふ雖も此事は姑く措き唯心家の所謂る心がダーウヰンの説く如き事實の秩序を順行するや否やを觀察して幽靈説の幾分か意味を存するの理を擧げざるへからず孔子が人皆堯舜と爲るへしとするの教は實驗學常則より觀れば所謂る唐人の寐言に相違なしと雖も支那人が古來



此兼言を實行して止まざるは支那歴代の史籍に於て國賤接塵の事跡を叙述するを推して明瞭なるに非ずや佛徒より觀れば勝者の艱難を侵すも敗者の艱難に陥るも共に宿世の惡報なりとして此解を終るも之を以て満足せざるの人は如何に所謂萬能の秩序順行を此點に就て汗跡し得へきか支那の歴史を千讀するも印度の經文を萬讀するも此目的を達するは難亦難なりと思はざるを得ず若し細密の追跡は爲し難しとして潰傳説を推し此逆戻の事跡を唯遺傳に基くとして此解を終はらんか若し「コンマパチリン」の如き物吾れ曾て天界に於て唯我獨尊を以て居る釋迦の上座を占めし阿頼耶の身体を搗造せし物質の一部に居りしことは佛徒が最も自得とする自造說應報說并に輪環說の三說を推し自ら信して疑はざれば現世に於て未だダーウヰンの説く如く進化の順序を踏んで人類たるの地位に達せざると雖も必要あれば人類と均しく思想を發し且つ言語を手段として之を他に告ぐるを難しとせずと云ば唯心派の所謂の心に於ける萬能を秩序順行の萬能と解するの人は如何に之を否むへきか若し之を否むへからずとせば幽靈說の意味あるを認めざるへからず幽靈說の意味ある此の如し若し見解を一轉して物理學上所謂の物質不消滅なる見解に入り假定に加ふに假定を以てして此見解を分拆せば此理益明瞭する所あらん抑も實理學上物質不消滅といへば外界に於て空と力の二素が長時を経ふるに従ひ相を變ずるも其相を顯す空及び力は時と相依りて相離れざるの義を解するの義ならん更に進んで釋せば力が空と時に依りて相分れざるの義ならん又更に進んで解せばスペンサーの説く如く力の凝存して消滅せざるの義ならん而て此知るへき力の凝存するはスペンサーが所謂知るへからざる者なり即ち可知力に相似する力ならん

んと假定する靈力の凝存するに由るならん左れば可知力凝存の極意は靈力の變相して止まざるの義にして他意あるへからず果して然れば可知力の諸種寧ろ個々は靈力の一變相にして靈力の變相する毎に前相なる一個の印象即ち力は所謂の消滅なる語が直接意味する如く消滅すとし後相の一個は顯出ずとして物質不消滅説を立つるより(靈界有常)物界無常説に従はんこと却て適當なるに似たり然れども古今宗教職并に以外の學者が物界無常を説くに係らず實理學者の間に物質不消滅を説く世運の進歩と共に益々盛かるへ何ぞや他に非ず凡そ人類の最も必要とする者は所謂の眞の知なりと雖も物界無常説は唯々疑に止まり眞に事實を経験するを意味するに至らざるも物界有常説は實驗を意味して即ち眞の知に達するに由るのみ即ち物界無常説より靈界有常説の直接適用を意味するに由るのみ而て其知に達するの方法は他に非ず靈力の一前相消滅すれば隨て一後相顯出し前相後相の間に吾人が直接實驗する所を以てせば連鎖とも認むへき關係を存すと思はざるを得ざるが故に靈力の一部なる後相を以て前相の變形なりと斷するの謂にして苟も物界的の實用を辨せんには實理學に於て此方法に依り此説を立つるは實に必要缺くへからざるなり然れども理想理學より觀察せば靈力の顯出する果して此順序に依るや否や寧ろ靈力の曾て顯出せし部分が其れ自身に再び顯出し更に再び隱入し更に又顯出し始終唯々靈力の一部が無量無限に變化して物界(寧ろ物理學界即ち物質界)を顯すか將た曾て顯出せし部分が他部と更代して此界を顯すかは靈力の一部をも全能と認むへきや不全能と認むへきやの問題が決し難き問題なるより推して決し難き問題なり即ち物界の有常無常は理想理學上知るへからざる問題なり此問題

眞に知るへからずとせんか有常説より觀れば犬猫狐等の動物は唯其應形の所作を爲すに過ぎずと雖も無常説より考ふれば此等の動物も亦人影を顯する所作なしと斷すへからず果して斷すへからずとせば人類の死靈は此等動物の形影を假り此等動物の死靈は人類の形影を假り無機物の死靈は有機物の形影を假り突然顯出するなしとも固より斷すへからざるなり果して然らんか此所見を推して幽靈説の眞意如何を觀察せば所謂妄妄なる死靈の言語運動等の觀念は無限有限相別ち難き經歷を意味する内界の空及び時と異様若しくは同様の經歷を意味する外界の空及び時と主客相接して起るなしとも又唯後者のみより起るなしとも知るへからず况んや適當經驗は唯知を意味するに過ぎざるも迷想即ち疑て亦不適當に經驗を意味する上に知と共に靈力の一顯表なるより推せば縦ひ實驗學上に於て意味なしとして棄てざるへからざるも理想學上より推せば意味ある疑なりと謂はざるへからず更に化學界に進み先づ農事化學の意味する通理より一般化學の意味する原則に遷り死体の變化するの順序を追跡するときは物理學と共に有常説を執らざる可らざるも適當實驗を盡し既に理想學の區域に達すれば有常無常實に知るべからずとして幽靈説を意味ある疑を意味すと認むるに至らざるを得ざるへし更に他語を以て要旨を擧ぐれば古來實驗學を以て理想學を排し理想學を以て實驗學を排し此二學常水火の關係に相立つと雖も此二學に於て此關係に相立つの性質あるに非ず唯實驗學を講ずる學者は實驗學の是非は實驗學の領分に於てすべきを知らず理想學を論ずる學者は理想學の理否は理想學の領分に於てすべきを知らず理想學に於てすべき是非を實驗學に於てし理想學に於てすべき理否を實驗學に於てし相互

に己を知らざる上に他を知らざるより起る不慮見に基くに過ぎざれば實驗學不可思議靈力説幽靈説の如き理想學に屬する者は固より實驗學を以て是非するの限りに非ず且つ此説の唯疑を意味して知を意味せざるは此説の疑を講ずる學ある理想學に屬する一點より推して明瞭なりと雖も試に世俗の習に依り理想學と知を講ずる學と假定して此學と實驗學を對照して幽靈の眞偽如何を觀察せば眞とも偽とも知るへからずとするのみ説て茲に至れば論議他路に走ると雖も曩に宗教論に於て冀願を宗教の本体と立つる旨趣に就き解説する所なかる、からず蓋此旨趣たる本項に對しては直接の關係を有せずと雖も理學原論の全体に對して頗る重大の關係を有する上之を茲に解説せば間接に本項の論證を裨補して一層明白ならしむる参考を與ふ所あればなり抑も冀願とは何ぞや性理學より觀察せば心意本体の一印象にして即ち情の類なるは固より疑なし且つ苟も心意本体の一種顯象なる上は外界の意味する顯象より内界の一種印象なる知若しくは疑に類似する徵質の多きも亦固より疑なし然れども内界の二力共に空と時の原形を以て動くの理を知り且つ「ミルスペサー」等の學者がバクルの意見に反して情先知後の説を立たる眞意を知らば冀願なる一種の情は之を知若しくは疑が外界に對する關係に比すれば外力に類似する所の多きは固より論を俟たざれば情なる内力の一種寧ろ情が空と時の原形に依りて動くの順序は知若しくは疑が空と時の原形に依りて動くの順序が外力の原形に依りて動くの順序に相似たるより更に相似る所の多きは隨て推測するに難からず果して然れば人類が因寧ろ力即ち眞に知りたる力に相似たりとして未だ眞に知らざる力即ち關係の少部を知つて大部を知らざる力に就て考究する最

終の目的は疑寧ろ知を手段として一種の情なる冀願の原形として認むべき空と時の原形と他人の情が意味する情の原形若しくは動物若しくは植物若しくは無機物が意味する空及び時の原形とを消極的并に積極的に接続するに外ならずと謂はざるべからず例ひば他人に就て意を達し若しくは他人の意を遂げしめんする最終の目的は雙方の細胞核の意味する時并に空の原形寧ろ情が意味する時及び空の原形を消極的并に積極的に接続するに存し又牛肉を喰らひ若しくは鶏豚を殺すの最終目的は人類の細胞核が意味する原形を牛肉の細胞核が意味する原形若しくは鶏豚の細胞核が意味する原形と消極的并に積極的に接続するに存し又金を欲するの最終目的は金の意味する空と時の原形を自己の情と他人の間に介して他人の情が意味する空と時の原形を自己の情と消極的并に積極的に接続するに存し且つ昔時金を解熱劑に用ひし點より觀れば金の最終原形を人類の細胞核が意味する空及び時の原形に消極的并に積極的に接続するに存するが如し此他推して知るべし而て此接続を圖るに今説く如く疑著しくは知を以て手段に供するを必要とする上は其手段とする疑若しくは知の眞の疑若しくは知に達するに従ひ益之を圖るの目的を善く遂ぐるに至ること固より疑ふべからざるが故に理想學と實驗學の進歩するに従ひ益之善く此目的を達すべしと雖も疑の如きは唯々間接手段たるに止まり直接手段は知あるに過ぎざれば疑を以て知に達し知を得て始めて直接に此目的を達するに至るは固より論を竣たざるなり左れば最終因を力と認めたるスペインサー雖も唯之を力と想像するに過ぎずして其后此想像せられたる力の關係を發見せざるのみに非ず爾后如何なる聖賢の顯出するも必ず此關係を知悉すべしと斷するの見込なき

しとせば其知悉せざる關係に就き如何に此接続の目的を圖るべきが唯々冀願なる情の一体が意味する空及び時の原形が力に依りて動くの法を以て接続を圖るの外なしと予は思はざるを得ず即ち靈に宗教論に於てスラエール、マツベルの無限界に依頼するを宗教の本体と斷せし所見を冀願と活解せし深意の存する所なり而て冀願を以て此接続を圖る方法如何を觀察せば既に宗教論に於て説く如く古今各宗教互に此方法を異にして或るは裸体斷食を以てし或るは奴羅太鼓を以てし或るは(讀經を以て佛の歡心を買ふを目的とせば)讀經を以てし或は唱歌を以てし或るは供物等を以てし冀願を行ふ手段の種々なる類例實に少なしとせず然れども予は此等の手段を行ふは却て冀願を行ふの主意に背く者と思はざるを得ず抑も知られたる力の原動力に就き其性質如何を觀察せば皆消積二作用ならざるはなし左れば之を推して知られざる力の性質如何を考察せば消積二作用と想像せらざるに非ず而て知られたる力の消積二作用寧ろ知られざる力が空及び時の原形に依り動くより顯せし力の消積二作用は野獸若しくは蠻人の情慾等を意味するも空及び時の原形に依り動くを假定せられたる知られざる力の未だ顯さざる性質を消積二作用と想像せば此二作用は萬物の最も偏有なる性質に類似すと思惟すべからざる非す即ち知られざる力の性質を消積二作用なりと想像し之に接続するに冀願を接続の手段として知の及ばざる接続を行ひ知の及ばざる所を補ふを實利學に適ふとせば此消積二作用は人類の最も偏有なる性質に類似し且つ更に超越する者なりと思惟するべからざるに非す他なし苟も知られざる力の性質を知られたる力の性質に同視して消積二作用と想像する上は此消積二作用も亦情慾憤怒の如き者を意味すと想像す

へからざるに非ず隨て地震若しくは海嘯の如き天災の遠因は之を知られざる力の憤怒なりと想像すへからざるに非ず此點より觀れば御符御水盜難除札(讀經を知的の手段とすれば)讀經の如き知的の手段を以て知られざる力に接續を求むるは當らざる遠しと雖も裸体斷食若しくは(讀經を情的の手段とすれば)讀經唱歌若しくは神樂奴羅太鼓の如き情的手段を以て接續を求むるは當らざるも遠からざるに似たり然れども情慾憤怒の如きは萬物偏有の性質と謂はんより寧ろ普通の性質に屬するが故に知られざる力の消積二作用が萬物の原動力に類似する所は更に高等偏有の者と想像せざるへからず而て試み無機物の知られたる性質より有機物の知られたる性質に遷り有機物の知られたる性質より動物の知られたる性質より動物の偏有高等なる者如何をり動物の知られたる性質より人類の知られたる性質に遷りて萬物の偏有高等なる者如何を觀察せば先づ第一着に顯れる者は人類の情知なるが故に更に此情知の偏有高等の性質如何を觀察せば高等の人物は西洋的の音樂を好むも神樂奴羅太鼓を喜ばず唱歌を喜ぶも藝妓の洛歌を樂まず更に高等に位する人物は眞誠の理想學を樂むも佛經の如き不開の理想學を厭ひ更に高等に位する人物の行ひ知らず識らず帝則に合ひ學を事とするの必要もなく萬一に過失あるも其過失は尋常過失の如く有害を意味せず且つ之を改むるを憚からず而て唯々慈愛を好む情の盛なるは事實に於て明瞭掩ふへからず且つ此事實に參するに人類の球上長者たる點より推し無數の他界に於ても此情知の下より上に向ひ益々顯明し上より下に向ひ愈々消滅するならんとの想像を以てせば空及び時の原形に依りて動く想像せられたる力の消積二作用は萬物の最高通性質に全く相似ざる者即ち萬物の最高偏有性質即ち人類の最

も偏有なる最大知最高情に相似て更に無限高等に位する知情なりと想像せば當らざるも尙ほ遠からずと信し得へきのみ更に他言を以て簡に云ば凡そ消積作用は萬物中の二個異物の異質相接して起ると物理の定則なるが故に萬物の消積作用即ち知られたる力の消積作用寧ろ消極若しくは積極の作用が知られざる力の積極作用若しくは消極作用と相接して此間より消積を起して正即ち少差を保つ道にして知的手段を除く外に存すとせば此知られざる力の消極若しくは積極の作用は之を無量情と無限知の合体と想像し此博愛無過に接するに冀願なる一種の情を以てせば即ち此道を得へしと想像するのみ左れば冀願を以て此博愛無過の性質を動かすの手段は唯々恩を感し罪を謝するを必要とするに過ぎずして讀經若しくは神樂の如き不開の手段を意味せざるも冀願を以て動かさんとする目的なる知られざる力の性質が唯々博愛無過を意味して唱歌若しくは讀經若しくは神樂の如きを喜ぶへきを意味せずと想像すへきの必要なるを推して明瞭なれば冀願を達するに唯々恩を感し罪を謝する二事を手段とするは冀願を宗教の主体と立つるの旨意に戻らざるも唱歌讀經洛歌の如き物を之を達する手段とするは此旨意に悖ること即ち知るへし蓋し耶穌教の如きは殆ど此眞法に従はんとするも尙ほ唱歌を此法に加ひんとするの弊あるを免れず精密なる實驗學と理想學の間に最も久しき教育を受けし耶穌教既に此弊ある上は佛法の如き此二學の精密なる教育なき宗教にして此等の弊を遁れざるは固より恠むに足らずと雖も施餓鬼の一事に就き更に此理を詳解して各宗教をして開悟に達せしめんとす抑も佛法に於て施餓鬼を以て補則を立つるの主意は三界萬靈平等若しくは十界差等なる語が示す如く實に曖昧模糊なる不開の思

想より成立すと雖も然れども眞意の存する所は幽界萬靈を假りに平等と立て平等の弊を差等に依りて救濟せんとするに在りと思はざるを得ず施餓鬼法を行ふ主意の眞意果して茲に存すとせば宗教上此法を行ふは若し正を均等と解せば已むべからざる結果なりと雖も子の民權論に於て説く如く正を少差の義なりとせば宗教上此法を行ふは却て幽界萬靈を平等と立つること(即ち上帝を純全と立つること)に相反すと謂はざるを得ず抑も平等主義の學者が正を均等と解する意を擴張して顯界と幽界の接續を企てんには先づ此二界共に平等と假定せざるべからず隨て顯界に於て罪を謝し恩を謝する義務を有すると一般に幽界に於ても亦顯界に對して罪を感し恩を感する義務を有すと假定せざるべからず又顯界に於て聖人の存すると同時に餓鬼の存する如く幽界に於ても亦菩薩の存すると同時に餓鬼の存するを假定せざるべからず隨て顯界の聖人と幽界の菩薩との間若しくは幽界の餓鬼に對し施與の仁義務を有し顯界の聖人寧ろ善男善女は幽界の餓鬼に對し施與の仁義務を有すと假定せざるべからずして正を均等と解するの結果遂に宗教上施餓鬼法を必要とする理を生ぜざるべからず隨て幽界萬靈を平等と假定するの眞意に反するに至りと雖も予の如く正を少差と解し顯界と幽界の接續を企てんには宇宙を平等と假定するなく此二界は國君と國民の間に存する絶對少差より更に純全なる絶對少差等と有すと假定せざるべからず既に此二界の間に此少差等を存すとて而て宗教を以て顯界と幽界の接續を圖る旨越を我れ依頼を受くるに非ずして我より依頼するに在りとせば幽界は唯仁を以て顯界に對し顯界は唯

以て幽界に對する關係を立つると即ち宗教の目的なりと假定せざるべからず宗教の目的既に此に存すと假定せば萬靈を平等と假定するの目的は直接より云ば幽界は顯界の如く恩の厚薄位の高下等の如き差別を立て能はざるを示すに在りと雖も間接より云ば萬靈盡く顯界の諸物より高等なるを示すに在りと謂はざるを得ず此目的の究極する所にして既に此に存すとせば施餓鬼法を行ふは萬靈を平等と假定するの意に反する實に明瞭なり若し反對者あり幽界果して全く顯界より高等に位せば此法を行はざるも可なりと雖も幽界必ず餓鬼なしと保すべからず若し餓鬼あらんか幽界を仁と認めて強求するの極は餓鬼の怒を招くとなき能はず夫の海嘯地震の如きは餓鬼の怒りたる結果なるなきが況んや顯界に於て差等を本則と立つるの弊は幽界を平等と立つる法を以て之を救濟し得るも顯界に於て平等を補則と立つるの弊は幽界を平等と假定すると同時一幽界に差等を立つるを以て救濟するに非ざれば他に救濟の道なきが故に我れも亦幽界に對するに仁を以てして餓鬼に類する感覺を満足せしむる所なかるべからず左れば施餓鬼法を設くるは縱ひ萬靈を平等と假定するの意に反するも尚ほ必要なりと云はんか抑も靈力の各部なる萬靈は各々同質の純全能なりや異質の純全能なりや將た同質若しくは異質の不全能なりや固より之を決するに由なきも宗教を設けて之に依頼する旨意は差等の本則と平等の補則を併用し義的の愛若しくは欲怒を行ふの手段を盡す上にも之を盡し尙ほ及ばざる所の救濟を乞ふに外ならざれば萬靈を平等即ち愛知の無量團塊なる上帝と假定せば善く之を乞ふ目的を立つるを得るも此第一の假定を補ふ爲めに此假定を爲すと同時に上帝の各部に差別を立て餓鬼なる感覺を上帝の性質に歸すると

きは此第一の假定を補ふより寧ろ之を破るに至る即ち顯界に於て差等を矯すに平等を以てすると同時に幽界に於て平等を矯すに差等を以てするときは此二界を平等無差と爲し却て此二界の間に少差を立つると同時に此二界の各物間も少差を立つるの意に反するに至る蓋し少差の分明ならざる幽界を平等と假定するは差等平等を併用して少差を立てんとするより却て少差を立つるの意に適すればなり故に予は此反對者ありと雖も旣餓鬼法を大害小益の無用法と斷して之を拋擲するの必要なるを疑はず即ち顯界の道義は顯界と幽界の差別を立つるを要する上に顯界の間に差別を立つるを要するも幽界に對する道義適當は幽界の間に差別を立す唯幽界と顯界の差別を設けて接續を行ふを以て満足するの實已むべからざるを疑はず果して然れば宗教の主体を設くる上に就ては萬靈は之を平等と假定せざるべからず然れども理想學に於ては之を平等とも差等とも認むべきが故に不開の宗教職あり人類の靈魂は夜光玉若しくは舍利骨に似て中就く耶蘇釋加の靈魂は神若しくは佛に似て動物の靈魂は各々其種類を異にするに從ひ金銀銅鐵に植物の靈魂は火水風雨に礦物の靈魂は瓜垢若しくは「コンマパチリン」等る鬼も似て輪環其外裝を異にすと説くも所謂の權利を以て斥せざる限りは眞ども虚ども批評するの限りに非すと認めざるを得ず所謂の靈魂説の眞偽を知るべからざる此の如し然れば則ち所謂の靈力の未だ知られざる部分の果して知るべからざるや否やの左右相決し難く隨て其靈力の存不存相決し難きは推して知るべし更に心界と物界の關係を少しく觀察せば此理益々明瞭ならん前に知るべき心として知られるたる性理の原働は知若しくは疑より寧ろ情に近しとするは晩近性理學者の唱ふ所にして自

ら之を實驗に徴して亦然りと思はざるを得ざるの理を論せり此理固より疑ふべからず既之を疑はざる上へ實驗性理學の現状より觀察せば之を動物心界の發達する順序なりと認めざるを得ざるも理想學より觀察し情の原形が疑若しくは知を生ずる事實を推せば情の知を生ずるは情の中に知を孕みたるに由り情の中は知を孕みたるは情の知より婉れたる明證と認めて情は之を女性寧ろ陰に知ひ之を男性寧ろ陽に譬ひ心界本体の形質は知情の積消二作用なりと想像せば却て主たるを想像するに難からず然れども若し此所見を以て是なりとせば智の情を生ずるは智の中に情を孕みたるに由り智の情を孕みたるは智の情より婉れたる確證なりとして反對に想像するも亦難からず左れば人類が情に始りて情に終るは嬰兒の生育が父母の慈愛に依り父母の長命を遂ぐるは孝養に依るの事實若しくは孔子の所謂の仁を信せし日本及び支那が夙に絶對の準標を此に取らし事實等を推せば情先知後は萬般經驗の許す所なりと認めざるを得ざるも理想學より想像に加ふに想像を以てせば此二者前後の順序如何は唯々妄想を逐ふて止むの問題なりと謂はざるを得ず試に佛徒に珠數の旨意を問ば此理益々明ならん若し之を問ば念珠の最大なる者は耶蘇教徒の所謂の上帝にして我法の所謂の阿羅耶なり之に亞く者は耶蘇教徒の所謂の天子にして我法の釋尊なり此他に大小の差別を立るべ各派の開祖と教徒の分別とも認むべし又此珠の全体を萬靈とも認むべし而て此珠を以て此等の者に譬ふは形体を指さず直に靈魂を指すの意なり而て之を兩手の指間に挟み摩擗するの意は彼大般若經等を誦讀し此等經文の意味する精靈に依り我法徒の存意を先づ最大如來に通じ此如來の威光に依り萬靈を得度せしめんとすると同時に大事を慮

り西洋學者の所謂る物理の定則に依り空氣の運動を起し之を手段にして更に我法徒の意を通し大願成就を遂げしめんとするに在り此他種々の因念あるも中就く要なるは此珠を輪形に維くは三界萬靈の轉位變境限りなきを指すの意なりと答ふるならん今を進んで此限りなき轉位變境の順序如何を問は一切經に種々と説きあるも此經文も無明生行なる語が示ど如く結局不明なりとの意を尾して終る之を以て考ふれば釋加も因明論の論法を以てするも究め難しとせしならんと答ふならん釋加の知寧ろ疑の淺深如何は暫く措き心界の如何なる關係に依りて存するかは到底究め竭すべからざると此一例を推して知るべし又物界に遷り成立の順序を觀察しダーウソンの説く如く球上諸物皆一種の原質より進化を起すとせばスペンサーの如く白血球の人間も釋加の如く黒血球の人間も共に此原質より組織すと認むべく且つ均しく此原質より組織する血球に赤黒の差あるは氣候の異なるに基くと認むべく且つ醫學者の間に世人白血球或るは赤血球を貴み黒血球を賤むも黒血球却て健全なるを觀れば赤血球必ず貴きに非ず黒血球必ず賤きに非ずとするの旨趣は黒血球能く惡境に堪ゆるとするも白血球は否らすとするの意に止まるか但しは他は仔細あるか此等學者の意見は暫く之を措きバーグルの文明史學スペンサーの社會理學等より推さは社會文明の進歩即ち社會顯象の緻密光彩は先づ黒血球に始まり赤血球に至りて大成せんとすること明瞭なれば世人の赤血球を貴み黒血球を賤むは概ね惡境適能と善境適能の相違に基くと認むべし而て此等の認定は實驗の許す所にして即ち知を以て目すべしと雖も轉して理想理學より此等物界の狀況を觀察せば唯々疑を起して止まんのみ試に印度學者にスペンサーと釋加の由來を異にする

の理旨を問は釋加は菩薩界に於て會て惡事を犯し惡魔即ち所謂る「*コンマバチリン*」の如き者に此界より逐斥せられ印度地考の如き地獄に陥落せし順序は恰も耶蘇が「猶太耶」なる昔時の菩薩界に於て罪を犯し刑に處せられて自業自得の罪惡を滅し神の許可を得て現世世界を去りて天國に就きしと反對に出で直接の宿縁は太た善からざりしも遠隔の宿縁は善きと視ひて印度の入獄以來宿世の惡事を悔悟し理學を講して因果の理を明にし罪を阿羅耶に謝し再び佛界に入り今は阿羅耶の次席を占めしのみならず「*アリヤン*」族なる族員は獨りスベシのみのみならず尙も縁むる者は球上若しくは他界に於て得度せしめしより會て印度に入獄せし釋加とスベシの間此差異あるならん然ども今日の釋加は昔日と異り釋加の肖像が示めす如く亞細人種より一層の金色を顯し阿羅耶の次席に於て理想理學の研究中に於て昔日の學問は「*スベシ*」に劣るも今は更に深遠に入らんとしわがと思はる而て其金色は現時化學者が一原素と認むる金色より遙に深遠の意味を含み彼金色を分拆して其成分を發見するは近きに在りとすも此金色分拆の成功は幾億万年の後に存すとも豫言し難しと答ふるならん物界關係の如何を知悉するの難きも亦推して知るべし左れば此知悉し難き兩界に就き雙方關係の如何を想像せば太陽の火力を以て焚き竭すべからざるの多紙にも書載し難き疑を發するに至るべければ唯々要を示して止まん今我れ茲に一杯の茶を飲まんか爽然愉快を感じるは茶の成分が先づ魄に觸れ之を手段にして魂に觸れ此二界の間に消積の二作用を起すに由るは知るに難からず而て茶の由來を尋ねれば土中より産せしとも亦知るに難からず左れば此感覺の遠き支因は土中より到れりとして知るに難からず然れども茶の成分

例ひば金の如きは何れより土中に産せしかを考ふれば佛界釋加之目糞より來るとも想像すべく金星より至るとも想像すへきも孰れとも決すへからず若し佛界釋加之目糞より來りとせば此感覺の遠き支因は佛界釋加之金体にして此感覺と釋加之目糞の二者が靈力の原形なる空及び時の原形に於て如何なる關係を保つとも知るへからず若し又我れ「ヨードカリ」の一滴を服せんか蕞地よ我れの魂魄間に消積の二作用を起し所謂惡魔を逐斥せんは實驗よ徴して知るに難からず然れども其惡魔の曾て猶太耶に於て耶蘇を逐斥せし惡魔なりや曾て釋加之淨土より窮斥せし惡魔なりや又以外の惡魔なりや知るへからず理想學上より心界物界の間に關係を想像せば知るへからざる關係の存する此の如し左れば予の宗教論に於てペンサーより一步進んで靈力が空及び時の原形に依り動く法を消積の二作用と解し人知の及ざる所は宗教と設け荷も人智を以て想像し得へき限り最も多智多愛の上帝即ち萬靈を假定し情を以て先づ之に接對し之を手段として我れと彼の間に消積の二作用を起し之を人道最終の救濟策と認むるも心界物界の關係を知悉し能はざるに由ること推して知るへし故に予は隱体寧ろ實体寧ろ知られざる力の果して知るへからざるや否を知らず隨て其存不存を知らざるなり

更に所謂因果應報の理に論及して此理を明解すへし抑も所謂因果應報の理は我國の如き久しき以前より佛敎の行れたる國に於て之を信するのみならず荷も人類として此念なきはなし然れども佛徒は之を佛敎の專有と認め他派に此念なき如く思ひ屬し暴言を放つあり或る佛徒の如きは耶蘇敎は大工師の上帝を本と爲すも佛敎は此理を本と爲す上帝の觀念を發するは此理を驗知するの結果なり結果を本に建つるの宗教は宗教とするに足らずとして耶蘇敎を廢せんとするに至る然れども耶蘇敎は此念あるは紀元前の大洪水を人類の罪過より起りとするを推して知るに足る然れども印度の如き他より制御を受けざる間は遊墮日を送り易き國に所謂應報理が發育し易く歐洲の如く自然に勤勉を要する國に發達し難きより觀れば之を佛敎の專有と認めて可なり果して然れば世人が所謂應報の理に就き耶蘇敎徒の説く所に非難を與ふは固より恠むに足らざるも先頃博士某は恰も「ミル」が三敎論を著すの際に耶蘇敎を非難せしと一般に佛敎の所謂報應の理に攻撃を與ひ而て佛徒の議論百出し終に某の惑を解かずして止みしは何ぞや某の短見與つて然る所あるは固より論を竣たせと雖も佛徒の淺識眞に之を解くに及ばざる所あるも亦與つて然る所なしと謂ざるべからず果して然れば佛徒は所謂應報の理を説くも未だ之を説くの道を知らずと認めて可なり所謂應報の理とは前に説く如く經驗未達の應報理にして實驗上所謂應報の理と其性質を異にし彼の理は實驗より起るも此の理は想像より起り彼れ是れ自ら異なる所なり抑も上帝の想像を發せんには先づ因果の理あるを假定するを要するは固より論を竣たせず雖も其要する所なる因果の理は唯々實驗的に彼物は此物より起り此物は彼物より起りとして彼物と此物との間に存する關係に就て認めたる一定不變の關係即ち類似の前者は類似の後者を起すとして認めたる此間に存する一定の關係に過ぎずして所謂因果の理は此關係を驗知し然る後萬靈即ち上帝を想像し此想像を本として起る者たるへ荷も思慮ある者は知るに難からず而て此理の用は實驗學の一基礎に供すること并に實驗的因果の關係を蕪如するの弊を保



護するに止るは予の宗教論を推して明瞭なり左れば彼佛徒が所謂の應報の理を本とし上帝を末として上帝説を攻撃するは真に此説を知りて然るにも非ず又此理を説くの道を知りて然るに非ず此道に明ならざるへからずと認めざるを得ざる彼佛徒にして此道知らざる上は茲に此道を説く各宗職の爲め社會の爲め感を解くは必要と思はざるを得ず蓋し所謂の應報の理は所謂の必至説の結果なれば此説に就き參觀の爲め學者の意見を聴く所なかるへからずミルの必至説并に意思自由説の對評を觀るに必至の眞義は同一の因は同一の果を起すの理を主とするの意と思はざるを得ず若し否らすとせば必至の意義を觀るへきなし然る所以は他に非ず例ひば誤つて毒物を食するときには此儘に抛擲すれば死の必ず至る言を誤たざるも解毒劑を服すれば此害を遁ることなきに非ず此點より觀れば意思自由説非なるに非ず必至説是なるに非ず畢竟必至とは自然繼續の誤名なりとするを此對評の主意と爲すが如し惟ふにミルに此見解あるは宗教の眞義を知らざるが故ならん何となれば宗教を立つるの必要を知り之を立つるに上帝を假定するの必要を知らば所謂の自然の關係は假りに必至なりと認めざるを得ず既に説く如く我より接情を手段として萬靈若しくは上帝と原動の接續を求むるを宗教の極意なりとせば我れに自由あるに似たりと雖も取捨彼れに在つて我れに存せざればなり而て此必至説を是認するも實驗學止更に害あるへからず例ひば誤つて毒物を食するとき如何に手段を竭すも解毒の方法に達せざれば之を所謂の天命と認め容易に達するも亦之を天命と認めれば毫も實驗學の研究を妨ぐる所なきが如しミルの天才にして此誤見に陥りしは宗教の極意に達せざるに由るは固より論を駁たずと雖も此極意に達せざ

るの源因なかるへからず而て此源因太た多かるへしと雖も耶穌教徒に於ては耶穌を上帝の獨子と認め(佛徒に於ては釋迦を阿賴耶の最愛兒と認め各々)之を上帝に接する唯一紹介者と頼みて其理學と其歴史を上帝の理學并に歴史と殆ど同視し何事にも之を引證し是非善惡を定め實驗學者が上帝の理學若しくは歴史に近からんと推究し若しくは記載する所に妨害を與ひ耶穌(若しくは釋迦)の本意に背く所の行爲を爲せしこと固より一源因たらざるへからず左れば所謂の應報の理を以て歸依の手段とし眞に人類をして上帝の慈愛に頼らしめんと願ふなれば耶穌(も釋迦も)球上には希に存せし所なりとするも天上地下を通觀せば星數より更に多く眞の聖人よ比すれば蛆虫より劣るへしとして耶穌(釋迦)の理學歴史は唯々耶穌(釋迦)の理學歴史とし自ら讀み且つ他人にも此意を以て讀ましむると必要なりと認め舊來の弊習を一洗する所なかるへからず遽に之を一洗せば恥なるに似たれども從來理學者の反對せしに係らず宗教を今日に維持せし功績より推せば決して恥とするに足らず假令ひ恥と思ふも遠く將來を慮るときは恥を知るは正に達する手段なりと思ひ必ず此舉に出でざるへからざるなり果して此舉に出でんが説教せる理想學を講ずるの際に此理を説くの必要に接せば此理固より經驗より直接に出でず唯々想像たるに過ぎるも尙ほ此理を假定するの意を明にする所なかるへからず例ひば上帝若しくは阿賴耶を完全若しくは不迷知とせば業惡寧ろ不完全若しくは迷知を起すの理も實もなかるへきも苟も上帝若しくは阿賴耶を因と認め萬物を果と認め學説の不足を補ふに宗教本体を設ぐるを必要なりとせば假りに上帝若しくは阿賴耶を目するに完全若しくは不迷知を以てするの必要なる意を述ふる所なかるへ

からず眞に之を述べれば宗教を説くにも學説を説くにも所謂の應報の理を假定するの必要愈々明白となり博士某の如きも自ら歸依し其報果に依り始めて上帝の理學に爪頭を染むる所あらん要するに假諦を説くに假諦の理を以てせば假諦を實なりとするは唯々疑を起すの手段となり信を生ずる害となるも信を起すの手段ならず信を起すの手段は唯々疑の疑として説き疑の理を詳にするに存するのみ而て理相理學は實驗理學より疑を起せば唯々之を審にするの本分を以て存し之を決するは實驗理學に屬し理想理學固より與る所に非ず故に此學に依り自存説自造説他造説の如き又所謂の應報理の如き唯々疑を以て存する學理を講せんとせば唯々疑を疑として疑の疑たるを審にするに止まるとし唯々假定の意を以て疑を決するの他此に之を決するの必要なかるべければ所謂の應報理を説くにも此方法に依らざるへからず若し此方法に依らず此理を説かば如何に實驗學者に宗教の歸依を望み且つ之を實驗學の基礎に供せんことを望むも其望みを達するなきのみ而て然る所以は所謂の應報理の如きは唯々疑を以て知り知を以て知るへからざるに由る而て其知を以て知るへからざる所以に上帝若しくは阿賴耶寧ろ實體寧ろ隱體寧ろ知るへからざる力寧ろ知れざる力を唯々疑を以て知り眞の知を以て知らざるに由る而て眞の知を以て之を知らざるは此力の存不存が不明なるに由るなり

更に佛敎の所謂の涅槃論より觀察せば此理益々明瞭するに至らん抑も涅槃とは何ぞや佛徒の説く所を聽けば涅槃とは吹消すの義にして即ち靜寂の義なり我敎の人を導く終極の目的は此境界に導くに在リカントヘーケルの徒が自由を以て宗教の目的とするは顯界に於て人を此境界に導くの意とするも幽界に於て人を此境界に導くの意とするも此徒の謂見未だ我釋尊の意見に及ばざる遠しとするの意なるが如し今此説法の意を觀るに宗教の實驗學并に政治等と目的を異にする所は人に未來の望を抱かしめ且つ之を達せしむこと此説教最終の目的なるに似たり然れど此目的の是非ハ暫く之を措き先づ此目的を達する手段なる涅槃の解は涅槃其者に就き人に完全の理會を起すや否やを問はざるべからず抑も佛法に於て般若の最も高尚なる者を大識眞如と説き涅槃を常寂と説くは宇宙の最高質を掲ぐるの意に出で所謂の最高般若は耶蘇敎の所謂の無限智に當り孔子の所謂の大智に當る又所謂の涅槃は耶蘇敎の所謂の無限愛に當り孔子の所謂の仁に當る者と認むるを得べきが故に佛者が涅槃を常寂と説くは般若を常動と認め之に對する語たるは疑ふべからず左れば佛者が涅槃を靜寂の性質なりと説くは結局仁の性質を示さんとするに在りとも認むべければ涅槃の此性質なりや否やを知らんには茲に仁の意義を解することを知るの最も便法ならん抑も支那學者が仁に與ふ解義甚だ多しと雖も最も要を撮ば皆仁は義に對する語にして義は我を主とするの謂なれども仁は他を主とする謂なりとする見解に歸するが如し蓋し此見解の深意は仁は他愛を主とし義は自愛を主とするの意なり然れども仁固より我を主とせざるに非ず左れば仁をヘーコンの無限愛なる無限他愛に解し又耶蘇敎家の所謂の博愛の意に釋するの非なるは固より論を俟たざれば予は義は之を時正道義と解し之に對して仁はスペンサーの所謂の絶對道義でなく耶蘇敎家の所謂の絶ゆるの道義と釋せんとす然れども耶蘇敎家の所謂の絶對道義の眞意を推すときは遂に愛の一事に歸するが故に仁は之を無限の自他の愛と解し

て可なり果して然らば仁を此義とし涅槃を仁を指すの義なりとせば佛徒の涅槃解は敢て意味なきに非ず左れば此涅槃解は他力大願成就の目的体即ち冀願の目的体を設くるにも自力大願成就の目的即ち絶對道義の標準を設くるにも實利上之を假定すべからざるに非ず然れども理想學より觀れば仁は存すとも存せずとも知るべからざれば假令佛徒の所謂涅槃は支那の所謂仁と認むるも存すとも存せずとも知るべきに非ず若し涅槃を文字般若若しくは真如般若に對して知るべからざる我れの至樂境界に存在する狀況なりと解するも知るべからざる我れ既に存すとも存せずとも知るべからざる上の涅槃なる至樂の狀況が存するや否や固より知るべきに非ず若し又涅槃を萬靈の一若しくは最大佛自身若しくは上帝自身を指す義と釋するも萬靈若しくは最大佛若しくは上帝既に存すとも否らすとも知るべからざる上は涅槃の存不存固より知るべきに非ず更に此說法最終の目的に就て是非を試み何は此理を明にする所あらん抑も佛徒が涅槃を設くるは他力に依りて即生成佛若しくは即死成佛を圖るの目的が自力に依りて即生成佛を圖るの目的が將た三者を圖るの目的が三者を圖るの目的なりとせば前二者を圖るの目的は宗教の主体に屬し後二者を圖るの目的は宗教の附体に屬し敢て可ならざるに非ず又カントヘーゲルの徒が宗教を自由ありとする見解に比して高尚ならざるに非ず然れども此至樂の境界を最終の目的とする一事は獨り宗教の専有に非ず政治及び實驗學等の最終目的の皆人を此至樂の境界に導くに外ならず左れば政治も宗教も理想學も實驗學も混同せる佛徒が此道を専有なりとするは井蛙の管見なりと謂はざるべからず然れども之を窮追深く咎むるに茲に目的とする所に非ざれば姑く不問に附し佛徒の

涅槃を設くるの目的を此至樂の境界に人を導くに在りと認めて涅槃の果しく理會すべきや否やと觀察する所なかるべからず抑も人類の幾億萬世を通し進化の幸運と溶化の惡運を経歴する後に於て太陽に幾億萬倍する巨体を備ひ且つ多情多知謂ふべからざる大心に達し不動明の石像を視る恰も現時人類の清氣一分子を視るに均しく釋加の心を視る恰も現時人が蛆虫の一感動を視るに均しきに至るべしとは敢て理會すべからざるに非ず然れども真如的に即生成佛并に即死成佛ありとするに至りては理會すべからざるに非らずや佛正の理會し得べしとして想像するは唯々顯象的思想を以て真如を顯象に同視して想像するに過ぎざるのみ若し又涅槃を以てスペンサーの所謂の靈力を指すとして涅槃の性質如何を觀察するも尙ほ此觀を遁るべからず抑も所謂の靈力とは顯象的の諸力と全く異なる力の義なれば顯象的の諸力に全く異なる力を想像せんは固より能すべからざる所なれば強て之を想像せんとせば顯象的の力に類似すとして想像する所なかへからず而て顯象的の如何なる力に類似すとして想像せば可なりやを問は知情意に類似すとして最正無限の知情意なりと想像すること最も適當ならん果して涅槃の本質を此三者を指すとせば佛徒が涅槃を以て目するを物体靜寂なりとする極意は最正無限の知情意は調和其妙度に達し所謂最適機關的道義を踏み能く順序あるが故に動くこと極めて速なるも却て動かざるに似たりとする點に存すと認めて可なり此極意を以て此點に存すとせば涅槃を他力大願成就の目的と建つる場合に於ては之を無量の愛知と認めて可なり又自力大願成就の目的と定むる場合に於ては之を無限知無耶意無量情と認めて可なり然れども涅槃を以て此の如く想像するも固より反對に想像すべからず

らざるは非ず故に暫く例を般若なる語に借りて論證する所あらん抑も俗間に般若と云ば醜顔の異名に解するの語なり此語を此意に解するは神道學者の惡口に基くか佛徒の教育に基くかは之を審にせざれども此意を推して般若なる語の極意を探れば空間の空間を尋ねば結局空の間に存する空即ち眞如は痘痕に似たりとする意にも取れ不規則の醜狀なりとする意にも取れ孰れども決すべからざるも般若を醜狀を意味すとするに至りては相似たり然るに佛者が嚴めしく般若なる語に就て説く所を聽がば般若は眞如なり大識なりとして之を美質と認むるが如し今佛者の説く所を眞なりとせば般若は美質なりと思はざるを得ざるも俗間に般若なる語に附する意義亦般若の性質に關係なしと思ふべからず推して涅槃眞如の性質を多端に想像すべき理を知るへし涅槃眞如の性質を觀察し佛徒の粗造なる解釋を補ふに精密の見解を以てするも尙ほ理會すべからざる此の如し左れば涅槃なる語若しくへ更に開發せる語なる靈力等の語を以て學者が表せんとする神の性質如何は到底理會すべからず既に神の性質を理會すべからずとせば神の存不存も亦隨て知るべからざるなり

所謂る最大原因の果して知るべからざるや又知るべきやは唯々疑を以て始終し來る問題にして未だ前後照應の明決は達せざる此の如し然らば此明決に達せざる故を以て所謂る最大原因を眞に不可知力として止まんか知の達せざる所の之を醫するに術なしとして不安心に居らざるを得ず然らば所謂る最大原因の本質を心即ち精神なりと認めて宗教を築き接情の手段を以て此不安心を醫せんとせんか實驗性理學上所謂る心は即ち同學上唯々心として知る心なるに係らず所謂る最大原因を此心に同視して再び不開の唯心論に還らざるを得ず然

らば物の心を生ずるの事實を推して所謂る最大原因を唯心論の所謂る心より寧ろ唯物論の所謂る物即ち物の意味する陰陽寧ろ消積の二作用に同視して不開の唯物論に従はんか實驗學上より觀れば心も亦物即ち物を顯す者より起りと謂はざるを得ざるも理想學上より觀れば物の心を生ずるは始め心の物を生ずる證跡とも認めべくして即物の中に心を包藏するの證跡と謂はざるを得ざる上に再び無宗教の不安心は陥らざるを得ず然らば所謂る最大原因の性質は實驗學即ち適當實驗學の上より觀れば如何とも知れざるに係らず適當實驗學を以て自ら居り且つ唯々此學を以て萬般經驗を統合して理學の最大基本を定めんと企てしペンサーが知らず識らず理想理學即ち不適當實驗理學の區域に闖入し唯心論と唯物論の共に意味する所にして實驗し得べき最終の結果は所謂る力なるが故に所謂る最終原因の性質は此知られたる力に類似するならんと思像し且つ此思像せられたる力が如何なる性質とも知るべからざることを證明するを宗教并に學說の最終の目的なりと論定し暗に宇宙を知るべからざる力が時及び空の原形に依り動く状態なりと解釋せし如く謂所る最終原因を唯々知るべからざる力なりと思像して止まんか尙ほ無宗教の不安心は居らざるを得ず如何すべきか予惟ふに理想學に依り更に一步を進め既に知られざる力と想像せられたる力の性質を心即ち無私の最大なる愛知と假定し我れ知既に竭きれば宗教の主体なる冀願を手段にして此知られざる力と接續を求めれば則ち知の及ばざる所を補ふを得へしと假定して此不安心を去るの一途唯々有るのみ而て此假定の實利學に適ふ猶ほ所謂る最終原因を所謂る知られざる力と假定するの實驗學より觀るも實利學に適ふと更に異なる所なければ予はスペンサーの

所謂る表意に於ては氏に背くも裏意に於ては尙ほ氏に従ひ此假定を爲すの必要を信して止まざるなり而て然る所以は他に非ず之を信せざれば無宗教の不安心に陥るも之を信すれば能く此憂を救ふへければあり然れども此假定を爲すは固より一時の窮策たるに過ぎざれば實驗學に於ても理想學に於ても此假定を爲すと同時に實驗學は理想學を利用し理想學は實驗學を利用し此假定の眞偽を觀考する所なるへからず即ち知られざる力に就て上掲接情の手段を措て他に接續の道を得ざる間は此二學共に此假定を爲し且つ此二學共に唯物唯心の兩説を推して萬般知疑の進化を謀る中に於て此假定の眞偽を觀察する所なるへからず而て然る所以は他に非ず此想像せられたる力は物とも想像し得へく心とも想像し得べくして即ち知るへからずとも知るへしとも未だ知るへからざればなり左れば最大理想學は學界を不可知者と可知者と區別して最本原則を立つる者に非ず未可知者と可知者即ち不適當實驗の疑を講ずる學と適當實驗の疑を講ずる學とに區別して適當實驗の達する疑若しくは知は實驗學を以て之を攻究し適當實驗の達せざる疑は理想學を以て之を考察し所謂る實驗の達する所は實驗學を以て之を實驗し實驗の及ばざる所は理想學を以て之を想像し實驗と想像と相依り相待つて理想學全般の進化を謀るの道を立つること即ち學界を實驗と想像の二大區に分別するを以て其最大原則とする者なり故に此想像せられたる力を知るへからずと斷念して止むの非なるは固より論を竣たすと雖も之を心なりと偏想して全く唯心論に退くも之を心ならずと偏想して全く唯物論に還るも共に是ならざるも亦論を竣たざれば宗教主体上に於ては假りに此想像せられたる力を心と認め學說上に於ては二學各々其所見に

従ひ此想像せられたる力の性質如何を觀究すること即ち理想學が最大原則を立つる目的とする所なりとす蓋し人類が未發見の眞理を發見するは此力に就て未だ曾て知らざる關係を知るに由るべきの事實を推して然るべし

茲に至り以上の所見を回顧せば今や人類の考察は學問の功績に依り宇宙を知るへしとも知るへからずとも決すへからざる力が空及び時の原形に駕して已に知るべき關係と未だ知るべからざる關係を以て變遷するの狀態なりと推測するの高度に達し且つ其未だ知るべからざる關係の性質を消積の二作用と認むるに至り且つ其消積の作用を愛知と認むるに達せり而て第一の推定に達するの理由は他に非ず宇宙を已に知るべき界と未だ知るべからざる界に兩分し更は已に知るべき界を心物の兩界に分斷し此兩界を實驗に依りて分拆するときは空時及び力の三種と見極はむる點に分拆を及し得るも茲に至れば空及び時の觀念は畢竟力を驗知するに基くと知るも力の觀念のれば必ず空及び時の觀念相伴ひ此二觀念を離れて獨り力の觀念を發する難く全く分拆の方法を失ふが故に已に知るべき宇宙は已に知られたる力の空及び時に駕するの狀態と解して止まざるを得ず既に已に知るべき宇宙の解を茲に止まらざるを得ずとせば實理想學は凡百講學上并に宗教上の都合に依り之を推して未だ知るべからざる宇宙は已に知られたる力に少しく似て大體異なる力の空及び時に駕する狀態なりと想像するを必要とするに在り又第二の認定に達するの理由は未だ知りべからざる宇宙の原動力は固より知りべからざるも世界の家族間に於て時ありては女が外務を理し男は内務を治め時ありては反對の關係を顯す事實并に動物寧ろ有機物が普く此關係を示すと同時に無機

物も亦此關係を示す事實等を推し之に參するにニエーロンの極微分子説即ち原素分子説を以てして想像せば所謂電氣として知られたる消積作用なる思想作用より更に鋭敏なる消積作用と想像し得べき理なきに非ず而て最も完全に已に知りべき宇宙の順序を保たんには宗教上に於て此順序と未だ知りべからざる宇宙の順序を接続するを要するが故に實利學は先づ試に此想像し得べき理を推し未だ知りべからざる宇宙の原働を消積作用と想像するを必要とするに在り又第三の認定に達するの理由は已に知りべき宇宙の順序を接続するの法則は描寫學并實驗理學と理想理學の進化するに従ひ漸く整備を告ぐるも未だ知りべからざる宇宙の順序に至りては理想學を以て想像せば種々の想像起らざるに非ずと雖も結局實利學に於て實行を許すべき想像に二種あり一は今説く如く此順序の發端を消積作用なりとする想像是れなり一は情先知後の眞理を推し且つ知亦情を意味し情亦知を意味すの眞理を推して此消積作用の本質を無量愛無量知の三作用なりとする想像是れなり唯此二種の想像あるに過ぎず而て實利學の茲に此三種想像の實行を許すは此二種の想像に依り未だ知りべからざる宇宙即ち未だ知りべからざる力の本質を無量愛無量知の消積作用なりと假定し此消積作用に接するに感恩感罪を手段に立て未だ知りべからざる力の順序を已に知るべき力の順序と接続して宗教の主体なる冀願を満足するに外ならざるが故に實利學上此消積作用を愛知の作用なりと認定するを必要とするに在り而て人類の實利學を以て此方向より起かんとする過歴へ始め先の個別の實驗を以て萬象の關係を探り是より描寫學と究理學の原形を起し亞て描寫學の異様に分別すると同時に究理學に實驗學と理想學の二様原形を起し

亞て此諸種の原形各々大乘小乗の差別を起し亞て此差別を起せば隨て此差別更に差別を起し萬般の差別を起して止まざる中に小差別を大差別に歸し其大差別を更に大差別に歸して萬般の思想が溶化より進化に遷り更に溶化より進化に移る萬般の事迹を統合する者は即ち茲に所謂理學最大原則にして之を萬般經驗の統合と稱するは敢て失當ならざるも其經驗は獨り眞の知に非ず經驗直接の疑并に間接の疑をも含むが故に所謂統合の知識は眞の知識のみなりと認むべからざるは亦明瞭なり左れば之を推して將來を望察せば現時の學界は往時の學界に比すれば頗る進化の状況に達せしと雖も其實験と理想の二大綱に依りて進化する大理は往時個別の經驗が意味せし實驗と理想の原形を發達せし過ぎざれば將來に至り現時の學界を回顧せば猶ほ今人が古人の學界を觀るに均しかるべきは敢て疑はずと雖も此大理に至りては更に變易することなしと思はざるを得ず果して然らんか既に宇宙を靈力の空と時の原形に依り動く状態と詳解する卓見あり今又此力の本質を愛知の消積作用なりとする案見あり將來固より必ず期すべからざるも予に於て此卓見に頼り此案見を立つるの外に於て卓見も案見も認めざる上へ彼卓見と此案見を假りに理學の最大原則と認め、て萬般の最終基本と認めざるべからざるも亦明瞭なり更に此二段に考顧する所を推して現狀を考ふれば神道の如き耶蘇教の如き理學より寧ろ所謂法律歴史に類する教を以て本とする宗教も佛敎の如き『造の理想を以て立つ宗教も共に實驗學を手段とし理想を進化すること即ち實驗學に基を起し疑の溶化を謀ると同時に疑の進化を圖り反して實驗學は理想學を手段とし實驗の進化を圖ること即ち理想學に礎を起し疑の溶化を謀ると同時に情を以て知を補

ひ知の進化を圖り人類の幸福寧ろ進化を目的とするの必要は萬世限りなく存在して止まざるへしと信せざるを得ざるが故に予は人類の進化は疑を脱して知に達するを意味し決して所謂不思議ならざる不思議より眞の不思議に向はんとするを意味するに非ず茲に向はんとするは唯々溶化あるのみ此事の是非に就き予の世上一般の批評を願ふは固よりスペインサ一尙は凝存し止まざるなれば再考せられんことを願ふ即ち本論の主意なり

更に他端より所論の要旨を述べれば理學の最大區別を爲せば形而上學と形而上學の二種あり形而下學とはコントの實驗學スペンサーの原理學の如き者を修正せし者即ち適当經驗より直接に起る理想即ち知を講ずる學の謂なり形而上學とはコントの所謂妄想學即ち宗教不適部の義にして即ち歐洲古來の神學并印度の佛學等を改造せし者即ち適當經驗より間接に起る理想即ち疑を講ずる學の謂なり而て此二學共に大小の兩乘に分れ此兩乘各々更に兩乘に分れ又兩乘に分れ萬種の理學を顯出して學課の差別を精密にする中に於て此等理學が基く所の最大原則を立るは茲又所謂理學大乘の本領に屬し此萬種の理學が進歩して此理學大乘論の不適當を示すときは更に其萬種の理學を利用して此理學大乘論を修正し更に其萬種の理學が基く所の最大原則を明にすること即ち理學最大原則を講ずる主意なりと思ふが故に先づ唯物論の原則に従ひ萬象は内界と外界の區別を問はず人類が適當な實驗し得る所を以て分拆せば皆原素と爲り亞て物理學と化學を併用して之を分拆せば電力熱力等の諸力と爲り亞て此等の諸力を分拆せんと欲するも實驗未だ之を許さざるが故に分拆を以て萬象の大本を究察して萬象の關係を究知せんは現時能はざる所なれば茲又至れば止むなく

此等の諸力を各種に區分して其各種の各自を概括し更に其概括せし結果を概括して萬象の關係を究知するの手段とし此手段を運用して先づ此等の諸力を各種に區分し各種の諸力を概括せば各種智力の一質を以て存するを知る更に進んで此等諸力の各種を概括せば尙を唯々力の一質を以て存し更に何等の性質をも認むべからざれば唯物論の萬象最本を唯々物なりとする極意は萬象の最本は物質の最要素なる適當實<sup>二</sup>的の力なりと推すに止まり更に何等の觀察も與ふ所なし然れども人類の實<sup>二</sup>にして徹頭徹尾失錯なしとせば唯物論の此極意は人類を指導するに充分なりと認めて可なり然れども失錯を免れざる現狀を推さば更に他に指導する所なかるへからず故に唯物唯心の二論を活用して理學最大原則を立つと明言し尙ほ唯物偏見の臭味を遁れざるスペンサーは此等諸力が不可知力の結果たるは萬般經驗<sup>三</sup>に於て之を許すが故に此等諸力を不可知力の結果なりと認めざるへからずとして彼の所謂不可知力を存在すとすは唯々疑的<sup>四</sup>理想之を許すに過ぎず實<sup>二</sup>固より許す所あるに非ず且つ此力の必ず知るへからざるや否やも知るへきに非ずと思はざるを得ず然れど諸力の因を假りに此力なりとする一事に就ては固より同意なれば予は此力を假りに存在すと爲し且つ世に説く如く此力を純靜力又は時及び空の原形に依り動く純主<sup>五</sup>力なりと假定するの必要なを疑はず然れども此假定は學界の指導標として充分ならざればニユートンの極微分子規則を借りて此力の性質を消積二作用なりと決定して更に學界に指導を與ふ所なかるへからず然れども此決定固より此力を實利上より存在すと假定すると一般に假定たるに過ぎざ

れば此決定必ず失謬なしと保すべからず既に之を失謬なしと保すべからずとせば此決定を推して達する實の錯謬を遁れざるは自然結果にして固より怪むべからず果して然れば如何に此錯謬を豫防若しくは矯正すべきか唯宗教と設けて接情の手段を行ひ此力の既に知られたる關係を未だ知られざる關係に接續するの緣由を求むるの外なきに非ずや而て求むるには唯心論に従ひ此力の消積二作用を知若しくは情若しくは此二者の消積作用と假定する所なかるべからず而て此假定の唯物論に背かざるは明瞭に抑も唯心論に於て萬象を唯心の結果せりとするの假定は假想又假想にして毫も直接に實を主とする唯物論の進捗を益するに足らずと雖も唯物論者にして此補助手段の必要を感じ之を得んには此知られざる力の意味する消積作用の性質如何を考観する所なかるべからず若し之を觀考し知若しくは情若しくは此二者以外の解義にして此必要を排除するに足る者を得ば敢て唯心論に従はざるも可なりと雖も之を得ざるべきは之を知若しくは情若しくは此二者なりと認めざるべからず而て之を認むるは唯物論の學則と相失せざるに非ずや何となれば凡そ消積の作用は反對なる性質相依りて成立するは唯物論の學則に於て疑はざる所なれば知られざる力の性質を消積二作用なりと假定せば其消積二作用は萬物最も希有の性質なる知若しくは情若しくは此二者に類似すと解するに非ざるより他に之を解する方法なければなり然れども唯物論者にして之を此義に解するは唯補助手段を行ふ場合に於てすべきのみ本幹手段に於て此義に解すべからざることは決して忘るべからず然れば苟も補助手段を行ふとは唯心論の思も亦忘るべからず果して然れば社會の現在なる文明に達せしは獨り唯物論の力に依るに

非ず唯物論も亦與つて効ありと謂はざるを得ず蓋し然るのみ非ず將來尙ほ相待つて社會の進捗を圖るの必要ありと謂はざるを得ず左れば理學界は先づ知られざる力を最終の目標と定め且つ其性質を消積二作用と假定し唯物論唯心論の二派に相分れ唯物論は實を主とし唯心論は理想を主とし相待つて進行すること即ち此學界の一有無二の最大原則なり然れども唯物なる語は此語を以て表する學の本意に違ひ唯心なる語も亦此語を以て表する學の眞志に協はざるが故に唯物なる語に更るに實なる語を以てし唯心なる語に更ゆるに理想なる語を以てし此二學を改稱し此二學の系統に屬する古今の學說を適當實に併に不適當實に徴して此二學の平行線に進捗するの道を圖るを自らに望み且つ世上に望むこと即ち此理學大乘論を著すの目的なり

然りと雖も前既に略に示せし如く凡そ學は適當本体のみを以て成立すべきに非ず必ず不適當附体と相待つて全備せざるべからず例ひは解剖學の如きは世上一般に解剖結果の事實を指すに似たれども解制方法の理學を前加せざれば全備せざるが如し左れば理學も亦本附の二体より成立するは勿論なれども描寫學は理學を附体と爲すに係らず理學は時として異なる種の理學を附体と爲し時として描寫學を附体と爲す例ひは予が藝に著せし宗教論の如きは實學を附体と爲すも世上字解を前加する物理學の如きは描寫學を附体と爲すが如し果して然れば上來論分せし分界の學は疑のみを本体として知を附体とし反して分合界の學は疑を附体として知を本体とし始めて完備すべきなり蓋し此事を以下理想實の各論に入り更に詳論する所あるべし



明治廿九年十月廿七日印刷  
同日發行

版權  
登錄

賣 捌 所

定價金貳拾錢

芝區佐久間町二丁目十六番地  
青木健之助方島根縣松江市外  
中原町八番地平民

著作兼發行人

山口松五郎

印刷人

芝區琴平町七番地  
乾義太郎

印刷所

同 乾活版所

日本橋區日本橋三丁目十四番地

丸善株式會社書店

神田區裏神保町七番地

明法堂

芝區佐久間町二丁目十六番地

擁萬樓



